グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成 一女性の役割を見据えた知の国際連携―

令和4(2022)年度 実施報告書

2023年3月 お茶の水女子大学 グローバル協力センター

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成 一女性の役割を見据えた知の国際連携—

令和 4(2022)年度 実施報告書

2023年3月

お茶の水女子大学グローバル協力センター

はじめに

本報告書は「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成-女性の役割を見据えた知の国際連携-」事業とその他の資金による令和4(2022)年度のグローバル協力センターの活動実績を取りまとめたものです。

グローバル協力センターは、国際協力・平和構築を中心とした国際的な課題に関する教育研究とこれらを通じた女性リーダーの育成、開発途上国の女子教育・幼児教育に関する支援を2つの柱としています。この2つの柱のもと、開発途上国や国際協力の現場から学ぶ授業、大学院生の海外調査支援、各種シンポジウム・公開講演会、幼児教育分野の人材育成のための研修等に取り組んでいます。また、「共に生きる」スタディグループを通じ、学生による自主活動を支援してきています。

本学は、平成 14 (2002) 年からアフガニスタン女子教育支援に取り組んでおり、今年度、支援 20 周年を迎えました。20 周年を記念し、「紛争地域の女子教育支援を通した国際協力のあり方」をテーマとして 11 月に開催されたシンポジウムは、コンソーシアムを組み協働して支援に取り組んできた五女子大学や支援機関の関係者、有識者、学生など多くの方々が参加し盛大に開催されました。この「五女子大学コンソーシアム」はシンポジウム開催にあわせ更新され、各大学による開発途上国の女子教育支援に向けての取組み推進が期待されているところです。なお、本学は、令和3 (2021) 年夏のアフガニスタン政変後も、絵本・図書館活動支援などの活動を継続しています。

また、当センターは、国際社会において議論・実践が進む「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ・持続可能な開発目標(SDGs: Sustainable Development Goals)」を重視し、平成 29(2017)年度から連続公開講座(SDGs セミナー)を開催しています。今年度も、児童の放課後の居場所づくり、学生による社会起業、国際協力関連テーマ(教育、保健、ブータン、インフラ支援、日系社会支援等)、昆虫食を通じた SDGs ビジネス等、幅広いテーマでセミナーを開催しました。SDGs セミナーに加え、南アジアに位置するブータン王国の開発の現状と課題、そのあり方を考える地域研究型セミナー「ブータンセミナー」を計 20 回開催し、多くの参加者を得ました。

今年度はセンタースタッフの交代があり、新体制のもと、NPOや国際協力関連授業の対面実施、開発途上国へのスタディツアーを再開することができました。

With コロナの状況の中、学内外の関係者の皆様のご支援・ご協力により、上記のように各種事業・活動を実施し、相応の成果を上げることができました。改めて心よりお礼申し上げます。今後も、これまでの事業・活動で得た平和構築と途上国の社会経済開発のためのネットワークと人材育成にかかわる知見や成果を活用し、更なる知の集積・発信と教育研究に取り組んでいきたいと存じます。引き続きのご支援をよろしくお願いいたします。

2023年3月

国立大学法人お茶の水女子大学 グローバル協力センター長 由良 敬

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成 -女性の役割を見据えた知の国際連携— 令和 4 (2022) 年度 実施報告書 目次

はじめに	\$
I. 事業の概要7	
II. 令和 4 (2022)年度の活動	
1. 活動の概要)
2. 各活動の概要)
2.1 国際的な課題に関する教育・研究、これらを通じた同課題に取り組む女性リーダーの育成)
2.2 開発途上国の女子教育・幼児教育に関する支援事業(教育・研究成果の国際社会への還元)11	
III. 国際的な課題に関する教育・研究、これらを通じた同課題に取り組む女性リーダーの 育成)
1. センター教員担当科目12	2
1.1 平和と共生演習・「平和と共生」実践演習12)
1.2 国際協力特論12	2
1.3 NPO 入門	ó
1.4 NPO インターンシップ(実習)16	í
1.5 国際共生社会論実習・国際共生社会論フィールド実習17	7
2. グローバル協力センター主催セミナー22	2
2.1 持続可能な開発目標(SDGs)セミナー22)
2.2 2022 年度ブータン連続セミナー34	ŀ
3. 途上国研究・国際協力分野海外調査支援56	,
3.1 実施概要)
3.2 今年度の募集と選考結果57	,
4. 大学間連携イベント59)
4.1. 5女子大学学生発表・パネルディスカッション(アフガニスタン女子教育支援 20 周年記念シン	
ポジウム))

5. 「共に生きる」スタディグループの活動	60
5.1 「共に生きる」スタディグループ説明会の実施	60
5.2 アフガニスタン勉強会	61
5.3 学生自主活動の支援	62
5.4 徽音祭(大学祭)における展示・発表	69
6. その他	
6.1 五女子大学コンソーシアム協定書調印	
6.2 アフガニスタン女子教育支援 20 周年記念シンポジウム開催	73
IV. 開発途上国の女子教育・幼児教育に関する支援事業(教育 還元)	・研究成果の国際社会への
1. 乳幼児ケアと就学前教育研修	76
2. アフガニスタン国未来への架け橋・中核人材プロジェクト等	78
3. アフガニスタンへの絵本寄贈	78
V. その他	
1. グローバル協力センター図書貸出状況	81
2. 情報発信	82
3. 各種イベント・案内のポスター	84

I. 事業の概要

【事業名】

「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成 -女性の役割を見据えた知の国際連携—」

【事業期間】

平成 22 (2010) 年度から令和 4 (2022) 年度

平成 22 (2010) 年度に文部科学省特別経費事業として 4 年計画で開始し、平成 23 (2011) 年度から大学一般経費事業に組み替え継続。

【概要】

グローバル社会における平和構築を目指して、先進国及び開発途上国の大学等との国際的ネットワークを創成する。このネットワークは、女性の役割を見据えた知的国際連携であり、先進国と開発途上国の大学等が共同して、開発途上国、特にアフガニスタンをはじめとするポスト・コンフリクト国・地域における女性と子どもへの支援の調査・研究と支援活動を行うとともに、ネットワークに基づく教育(人材育成)の実践の場とする。

【事業実施主体】

国際本部グローバル協力センター

【目的・目標】

本事業は、現代のグローバル社会における最重要課題である開発途上国、特にアフガニスタンをは じめとするポスト・コンフリクト国・地域における女性と子どもへの支援を目指した、知的国際連携 による教育・研究・社会貢献を目的とするものである。

ポスト・コンフリクト国・地域を含む開発途上国では、女性は経済的・社会的弱者であり、中等・高等教育を受けることが非常に難しいのが現状である。お茶の水女子大学は、大学の基本的な目標として「すべての女性がその年齢・国籍等にかかわりなく、個々人の尊厳と権利を保障され、自由に自己の資質能力を開発し、知的欲求の促すままに自己自身の学びを深化させること」を掲げている。さらに世界の女子大学の多くもまた、「自らの知見を世界の平和のために使う」ことを建学の精神としている。本事業では、こうした世界の女子大学が持つ建学の理念を実現するために、女子大学がひとつになって平和を築くための活動を行うことを目的とする。

本事業の取組みは、お茶の水女子大学が拠点となり、日本及び世界の女子大学とネットワーク (フォーラム)を形成し、大学の構成員 (教職員、学生・大学院生、卒業生の組織) による大きなネットワークによって開発途上国の女性と子どもへの支援、紛争によって傷ついた女性と子どもへのサポートを行うものである。また、こうした活動は、大学の使命である教育・研究・社会貢献を活性化し、この

分野の人材育成活動に資することが考えられる。

本事業を通じて、大学間国際連携に基づくグローバル社会における平和構築の知的ネットワークの形成と、これに基づく教育・研究活動システムの創成を目指す。

【グローバル協力センター 2022年度構成メンバー】※2023年3月現在

職名	氏名
センター長/教授	由良 敬 (2022.4-)
副センター長/特任准教授	小田 亜紀子 (2022.10-)
講師	平山雄大
センター員/教授	須藤 紀子
センター員/教授	浜野 隆
センター員/教授	森 義仁
センター員/准教授	荒木 美奈子
センター員/助教	脇田 彩
アカデミック・アシスタント	駒田 千晶
アカデミック・アシスタント	豊原 久美子 (2022.7-11)
アカデミック・アシスタント	奥村 真理子 (2023.1-)

[※]この他、本学の元アフガニスタン留学生がアカデミック・アシスタントとして勤務。

II. 令和 4 (2022) 年度の活動

1. 活動の概要

グローバル協力センターは、国際的な課題に関する教育研究とこれらを通じた女性リーダーの育成、開発途上国の女子教育・幼児教育に関する支援を 2 つの柱としてきている。今年度は、その柱の 1 つであり、新型コロナウイルス感染症の世界的蔓延の影響を受け 2020 年度・2021 年度と実施に至らなかった「国際共生社会論実習」・「国際共生社会論フィールド実習」(開発途上国スタディツアー)の実施に至った(実習は令和 5(2023)年 2 月に 1 回実施)。また、2 つ目の柱のうち、「乳幼児ケアと就学前教育(アフリカ・中東)」研修についてはオンラインで実施した。他方、アフガニスタン女性教員等短期研修については、令和 3(2021)年 8 月に発生したアフガニスタン政変により実施に至っていない。

本学は、平成 14 (2002) 年からアフガニスタン女子教育支援に取り組んでおり、今年度、支援 20 周年を迎えた。20 周年を記念し、「紛争地域の女子教育支援を通した国際協力のあり方」をテーマとして令和4 (2022) 11 月に開催されたシンポジウムでは、コンソーシアムを組み協働して支援に取り組んできた五女子大学や支援機関の関係者、有識者、学生などによる開発途上国の女子教育支援に向けたメッセージ、講演、ディスカッションが行われ多くの参加を得た。この「五女子大学コンソーシアム」は、シンポジウム開催にあわせ更新され、今後、各大学による開発途上国の女子教育支援に向けての取組み推進が期待されている。なお、本学はアフガニスタン政変後も、絵本・図書館活動支援などの活動により、アフガニスタン女子教育支援を継続している。

また、当センターは、国際社会において議論・実践が進む「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ・持続可能な開発目標(SDGs: Sustainable Development Goals)」を重視し、平成 29(2017)年度から連続公開講座(SDGs セミナー)を開催している。今年度も、児童の放課後の居場所づくり、学生による社会起業、国際協力関連テーマ(教育、保健、ブータン、インフラ支援、日系社会支援等)、昆虫食を通じた SDGs ビジネス等、幅広いテーマでセミナーを開催した。SDGs セミナーに加え、南アジアに位置するブータン王国の開発の現状と課題、そのあり方を考える地域研究型セミナー「ブータンセミナー」を計 20回開催し、多くの参加者を得た。

2. 各活動の概要

2.1 国際的な課題に関する教育・研究、これらを通じた同課題に取り組む女性リーダーの育成

- (2) グローバル文化学環設置科目「国際協力特論」において、講義や議論を通じ、開発途上国の 社会経済の課題と国際協力について、具体例を紹介しつつ考察を深めた。12 月にはアクティ ブ・ラーニング・アワー(ALH)として、横浜市にある JICA 横浜移住資料館を訪問した。 また、開発途上国の現場で活躍する専門家やボランティア経験者から、直接話を聞く機会も

積極的に設けた。

- (3) 全学共通科目「NPO 入門」において、NPO を通して現代の社会問題を知り、その解決の方向性を探った。NPO を巡る諸相を多角的に取り上げると同時に、NPO で活躍するゲスト講師からお話を伺う機会を設けた。また、現代の社会問題と対応策についてグループワークを行い、架空の NPO の事業計画に関する発表を行った。
- (4) 分離融合リベラルアーツ(LA)科目「生活世界の安全保障 23 NPO インターンシップ(実習)」において、実際に NPO(認定特定非営利活動法人 Learning for All、地域留学プログラム「ヤッチャの学校」、特定非営利活動法人放課後 NPO アフタースクール、Work and Play SOSHIGAYA)の活動に参加することにより、NPO の現状や役割、抱えている課題等を具体的に学んだ。
- (5) 全学共通科目「国際共生社会論実習」及び共通科目(大学院博士前期課程)「国際共生社会論フィールド実習」において、①事前学習、②現地調査、③事後学習を通して、貧困、ジェンダー、教育、地域間格差等のグローバルな課題についての理解を深めた。現地調査は2023年2月7日~16日(合計10日間、現地滞在7泊8日)にかけてブータンで行い、履修生は各自が設定した研究課題の遂行のため、関連機関への訪問や人々へのインタビューを実施した。
- (6) 「持続可能な開発目標(SDGs)セミナー」を計7回(第19回~第26回)開催した。各回のテーマは、児童の放課後の居場所づくり、学生による社会起業、国際協力関連テーマ(教育、保健、ブータン、インフラ支援、日系社会支援等)、昆虫食を通じたSDGs ビジネス等多岐に渡った。
- (7) 「2022 年度ブータン連続セミナー」(全 20 回)を通じて、参加者とともにブータンの開発政策や国・地域の在りかたを考えた。毎回ブータンを扱った国内外の新旧映像作品を取り上げ、映像作品の視聴、発表者(コメンテーター)からの簡単な解説、質疑応答という流れで実施した。
- (8) 途上国研究・国際協力分野海外調査支援では、「祖父母養育と青年期の心理的適応との関連」、「中国の失独者における自助的マインドフルネス療法への参加意図の関連要因について」の2件の海外調査を採択・支援した。しかし、2件ともに、年度内の調査実施が困難となったため、支援に至らなかった。
- (9) 大学間連携イベントとして、アフガニスタン女子教育支援 20 周年を記念し「紛争地域の女子教育支援を通した国際協力のあり方」をテーマとして開催されたシンポジウム(令和4(2022)11月)において、五女子大学コンソーシアムを構成する各大学の学生による国際協力活動の発表とディスカッションを行った。
- (10) 「共に生きる」スタディグループの説明会、スタディグループメンバー有志による「アフガニスタン勉強会」を実施するとともに、スタディグループメンバー学生の自主活動を支援した。また、対面とオンラインのハイブリッドで開催された徽音祭(大学祭、令和4(2022)年11月)において、スタディグループメンバーによる活動の展示・発表を行った。
- (11) アフガニスタン女子教育支援の目的で平成 14 (2002) 年に調印され、その後範囲を開発途 上国の女子教育支援に広げ継続してきた「五女子大学コンソーシアム」(本学、津田塾大学、

東京女子大学、奈良女子大学、日本女子大学による、以下「コンソーシアム」)の期限が令和 4 (2022) 年 10 月末に期限を迎えた。コンソーシアムは、アフガニスタン女子教育支援 20 周年を記念して開催されたシンポジウムの機会に合わせ 1.1 月 4 日に本学にて五女子大学学長により調印(更新)された。今後、各大学による開発途上国の女子教育支援に向けての取組み推進が期待されている。

(12) 上記 (11)の通り、アフガニスタン女子教育支援 20 周年を記念し、「紛争地域の女子教育支援 を通した国際協力のあり方」をテーマとして令和 4 (2022) 11 月にシンポジウムを開催した。 シンポジウムでは、コンソーシアムを組み協働して支援に取り組んできた五女子大学や支援 機関の関係者、有識者、学生などによる開発途上国の女子教育支援に向けたメッセージ、講演、ディスカッションが行われ、多くの参加を得た。

2.2 開発途上国の女子教育・幼児教育に関する支援事業(教育・研究成果の国際社会への還元)

- (1) 乳幼児の保護と教育の観点から、国際的にニーズが高まっている幼児教育分野の人材育成のため、アフリカ・中東 5 ヵ国の行政官、視学官、指導主事等を対象に「乳幼児ケアと就学前教育研修」(JICA 課題別研修)をオンラインで実施した。
- (2) JICA「アフガニスタン国未来への架け橋・中核人材プロジェクト」による2名の研修員の受け 入れを行うとともに、アフガニスタン留学生の本学における研究活動、就職活動の側面支援を 行った。
- (3) 公益社団法人シャンティ国際ボランティア会との連携を通して、アフガニスタンにおける絵本作成配布・図書館事業を支援した。

III. 国際的な課題に関する教育・研究、これらを通じた同課題に取り組む女性リーダーの育成

1. センター教員担当科目

1.1 平和と共生演習・「平和と共生」実践演習

2015年9月の国連総会で、今後の国際社会、また開発途上国、先進国を含む各国の社会の方向性を考えるためのマイルストーンである「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ・持続可能な開発目標 (SDGs: Sustainable Development Goals)」が全会一致で採択された。SDGs は、「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現のため、2030年を年限とする 17 の国際目標である (目標は、貧困、飢餓、保健、教育、ジェンダー、イノベーション、気候変動等)。

本科目では、SDGs の各ゴールについて、その概要及び特に開発途上国の現場の状況を理解するための文献・資料を取り上げ、議論を通じて考察を深めた。さらに、SDGs を巡る議論・課題についても取り上げ、考察を行った。特に現場の視点を持って考えることを重視し、以下の通り現場の声を聞く機会も設けた(「実践演習」については履修登録がなく、開講せず)。

【ALH 概要①】

- テーマ:「緒方貞子さんから何を学び、どう生きるか(オンラインシンポジウム視聴・議論)」
- 日 時:2022年11月15日(火)~12月17日(土)
- 内 容: 2022 年 11 月 15 日にライブ配信された「緒方貞子シンポジウム「あなたなら何をしますか?」 ~緒方貞子さんから何を学び、どう生きるか~」 https://www.jica.go.jp/jicari/ja/news/event/20221115_01.html (独立行政法人国際協力機構(JICA) 主催)を視聴後、その考察を授業外で集まり議論、内容を代表が A4 版 1 枚程度にまとめて提出。

【ALH 概要②】

- テーマ:「開発途上国/国際協力の現場経験者の話を聞き、考察する(オンラインイベント参加 / 視聴)」
- 日 時:2022年12月7日(水)~2023年1月19日(木)
- 内容: JICA が主催する複数のオンラインセミナー・イベントから1つを選び、視聴/参加し、 授業で概要と所感を発表し、履修生間で議論する(参加できない場合はレポート提出)。

1.2 国際協力特論

本科目では、開発途上国の現状、SDGs、人間の安全保障等、国際協力上の課題や国際協力の歴史を総論として取り上げつつ、分野・課題別の具体事例、国際協力の一環としての海外の日系社会支援、日本国内の多文化共生の取組みみ(外国人労働者支援等)などについても理解を深め、全体を俯瞰する視座が養われるよう試みた。これらテーマについての参考文献、映像資料を取り上げ、講義、プレゼンテーション、議論を通じて、開発途上国が直面する課題について理解を深めるとともに、日本が

抱える課題とも密接に関係する、その背景や構造的な要因にも目を向けた。また、可能な限り、政府 施策や ODA プロジェクト等の事例を紹介することで、理論と実務双方の検討、相互関係の考察を試 みた。ゲスト講師による多角的な情報と考察も、現場に根差した理解に繋がったものと考える。

また、12 月にはアクティブ・ラーニング・アワー(ALH)として、横浜にある JICA 横浜移住資料館を訪問した。

【ゲスト講師による講義の概要】

- テーマ:「国際協力の現場から: JICA と UNICEF での教育/保健分野の協力について」
- 日 時:2022年12月6日(火) 15:00~16:30
- 講 師:小島路生氏(国際協力専門家&一般社団法人 Think Locally Act Globally(TLAG)事務局長&トレイルランナー)
- *第21回持続可能な開発目標(SDGs)セミナーとして実施。
- テーマ:「SDGs とインフラ支援」
- 日 時: 2022年12月13日(火) 1.5:00~16:30
- 講 師:小中鉄雄氏(埼玉大学研究機構研究推進室・レジリエント社会研究センター教授・お 茶の水女子大学 SDGs 推進研究所客員教授)
- *第22回持続可能な開発目標(SDGs)セミナーとして実施。
- テーマ:「海外の日系社会・日系社会支援」
- 日 時:2022年12月20日(火) 9:00~10:30
- 講師:石森和磨氏(アリストテレスの窓代表・JICA海外協力隊経験者)
- *第24回持続可能な開発目標(SDGs)セミナーとして実施。
- テーマ:「JICA の教育支援」
- 日 時:2022年12月20(火) 15:00~16:30
- 講 師:太田美穂氏(株式会社コーエイリサーチ&コンサルティング主席コンサルタント)
- *第25回持続可能な開発目標(SDGs)セミナーとして実施。

※第 21, 22, 24, 25 回持続可能な開発目標 (SDGs) セミナーの内容については、**2.1 持続可能な** 開発目標 (SDGs) セミナー $(p.23\sim)$ を参照。

【ALH 概要①】

■ テーマ:日本人移住の歴史、海外の日系社会

■ 日 時:2022年12月21日(水) 14:00~16:00

■ 場所: JICA 横浜移住資料館

■ 内容:ボランティアガイドによる説明・視察後のディスカッション・アンケート提出

【ALH①実施報告(履修生による)】

「国際協力特論」受講生が JICA 横浜移住資料館を視察

2022 年 12 月 21 日 (水曜日)、「国際協力特論」のアクティブ・ラーニング・アワー (ALH) として、受講生等 6 名が横浜・赤レンガ倉庫近くにある JICA (独立行政法人国際協力機構) 横浜移住

資料館を視察しました。当日は、ガイドの方に ご案内いただきながら JICA 横浜移住資料館 (以下、「資料館」)を見学しました。資料館 のある JICA 横浜の建物には、途上国関連事業 を行う方や途上国から来た研修員の方が宿泊す る施設も併設されており、様々なルーツを持つ 方が集まる場所でした。

展示室に入ってすぐに目に飛び込むのは、大 きな山車。アメリカ、オレゴン州ポートランド



移住の歴史についてガイドの方にご案内をいただく

市のローズ・フェスティバルという催しで、日系人らが自分たちの従事する農業、野菜作りを広めようと製作し、出したものだと言います。ガイドの方に説明を受けましたが、野菜を食べる文化が薄かった中南米に野菜の文化を持ち込んだのは、移住し定着した日系人でした。この山車を抜けて、日本

人の移住の歴史を1つ1つ追いながら、当時の 日本人らの生活の様子にも迫っていきました。

展示室では、日本人の移住の歴史について、 大きく5つの時代に分け、説明されていました。①日本は加工貿易では国が立ち行かなくなり、ハワイの協力のもとサトウキビ農園に従事する官約移民を派遣しました。その後ハワイがアメリカに併合されたことによりこの制度は終了しますが、②仕事も稼ぎも多いハワイやアメ



野菜山車

リカ本土へ引き続き日本人は移り住んでいきます。しかし、アメリカの中で「日本人に国を侵略される」という捉え方が広まり、反日感情が高まっていきました。1924年頃から、アメリカへの移民ができなくなった日本人は、③多くが南米への移住に向かいます。南米への移住は出稼ぎとしてではな

く、家族で訪れて定住する形での移住でした。また、アメリカでは、太平洋戦争中、多くの日本人が強制収容所に送られました。④第二次世界大戦後、敗戦により没収された植民地から、多くの日本人が帰国します。しかし、LARA 物資などの援助の力を借りながらも、日本本土でも敗戦により満足な生活ができていない状況でした。そこで、政府を挙げて戦後移民と呼ばれる移民の動きがありました。そして⑤現代、政府による移住送り出しが終了した後、出稼ぎ等で日本に来る日系人の動きなどがあります。

見学後のディスカッションでは、多くの学生が②後の反日の動きへの衝撃を隠せずにいました。強制的に収容されるほど反日感情が高まり、法律改正などの手を使ってまでも日本人が迫害されてきたこと、その歴史自体に大きなショックをうけ、現在の日本人が持つ移民や難民へのバイアスへと重ね合わせる学生もいました。その反日感情の中、戦争で日本側を手引きするだろう、という反日プロパガンダに抵抗しアメリカへ誠意を見せるために、忠誠登録を行って日系人のみの部隊を作った、というエピソードもあり、意外性を感じた、という声もありました。

私も同様の感想を持ったうえで、日系人の自律性へと考えが巡っていました。ブラジルへと移り住んだ日本人は、日本人の魂を維持し続けようと、移住後生活が安定してきてから日本人学校を自分たちの力で作ったと言います。現代の感覚から見ると、教育は重視され保障されるべき権利であり、政府の強い斡旋があった移住において教育などのサポートがほとんどなかったことは違和感がありました。しかし、当時は生命維持が第一であったことを考えると、移住する国民も国も、教育を考えるほどの余裕はなかったのだと推測されると共に、教育が内から求められる存在である、という環境に新鮮味と憧れを抱きました。現代は、教育が当然の権利として与えられるものであるがゆえ、矢印が本来と逆を向いてしまっているようにも感じました。

また、前日 12 月 20 日に開催された第 24 回 SDGs セミナー



見学後のディスカッション

「海外の日系社会・日系社会支援」でも感じましたが、日系人を「日本人の枝分かれ」として考えることには、事実とのズレがあるように感じました。もとい、「oo人」という考え方が、根本から見直されるべきであるように思いました。ガイドの方は、「今、日系人は見た目ではわからない。本人が日系人だと思えば、日系人なのだ」とおっしゃっていました。これは日系人のみならず、世界に生きる1人1人において言えるのではないでしょうか。日本からアメリカへ渡った者たちは、戦争において自分たちの部隊を作ってまでアメリカへ忠誠を誓いました。南米へ渡った移住者らは、現地で自分たちの生業、存在意義、文化を、自分たちの手で形づくっていきました。ブラジルにいる日系人は、

日本人とは全く異なる文化を形成して、今を生きています。ルーツは自分自身のアイデンティティと

して大切に守りながらも、自分自身が誇りに思えるアイデンティティを、国境に囚われずに持つこと。それを互いに受け入れられるような社会を自分の周りからでもつくっていきたいと思うと共に、それらが現在の難民問題や文化間の摩擦・バイアスを軽減し、多くの人が生きやすい社会になることを望みます。

(生活科学部心理学科2年 小川祐奈)

【ALH 概要②】

- ■テーマ:「開発途上国/国際協力の現場経験者の話を聞き、考察する(オンラインイベント参加/視聴)」
- ■日 時:2022年12月7日(水)~2023年1月19日(木)
- ■内容: JICA が主催する複数のオンラインセミナー・イベントから1つを選び、視聴/参加し、 授業で概要と所感を発表し、履修生間で議論する(参加できない場合はレポート提出)。

1.3 NPO 入門

全学共通科目「NPO 入門」において、①NPO の活動理念や特徴を知り、その存在が社会に与えている影響を理解すること、②NPO の役割やその背景に潜む社会問題について、自らの考えを自分自身の言葉で述べることができるようになること、③NPO による社会問題解決の方法を、グループワーク(事業計画書の作成)を通して学び、提案力、行動力を身につけること、④授業で学び得た知識を、履修生自身の実践や社会貢献活動に繋げることを到達目標に、全13回の授業を行った。NPO の定義と全体像、海外と国内におけるNPO の位置づけ、NPO の行政・企業との協働等NPO を巡る諸相を多角的に取り上げると同時に、ゲスト講師からお話を伺う機会を設けた。また、現代の社会問題と対応策についてグループワークを行い、架空のNPO の事業計画に関する発表を行った。

【ゲスト講師による講義 概要】

テーマ:「居場所づくりの現場から」

日 時:2022年6月20日(月)13.20~14:50

講 師:笹間優衣氏(認定特定非営利活動法人カタリバ職員) *第19回持続可能な開発目標(SDGs)セミナーとして実施。

1.4 NPO インターンシップ (実習)

文理融合リベラルアーツ(LA)科目「生活世界の安全保障 23 NPO インターンシップ(実習)」において、実際に NPO の活動に参加することにより、NPO の現状や役割、抱えている課題等を具体的に学んだ。今年度の履修生は、認定特定非営利活動法人 Learning for All、地域留学プログラム「ヤッチャの学校」、特定非営利活動法人放課後 NPO アフタースクール、Work and Play SOSHIGAYA にてそれぞれ実習を行い、第1回目標管理シート、第2回目標管理シート、実習日誌、報告書を作成しながらその体験を言語化した。また、報告会にて学びの振り返りと共有を行った。

1.5 国際共生社会論実習・国際共生社会論フィールド実習

全学共通科目「国際共生社会論実習」及び共通科目(大学院博士前期課程)「国際共生社会論フィールド実習」において、①事前学習、②現地調査、③事後学習を通して、貧困、ジェンダー、教育、地域間格差等のグローバルな課題についての理解を深めた。

具体的には、①事前学習において、資料の購読・発表、外部有識者による講演等を通して訪問国の歴史・政治経済・社会等に関する理解を深めるとともに、履修生各自が興味関心・問題意識に則した研究課題を設定し現地調査の計画を策定した。②現地調査は2023年2月7日~16日(合計10日間、現地滞在7泊8日)にかけてブータンで行い、各自の研究課題に関連する諸機関の訪問・見学、都市部・農村部に暮らす人々へのインタビュー等を行うと同時に、その国に根づく文化・価値観・生活様式に触れ、異文化への、もしくは開発途上国への自分なりの対峙の仕方を模索した。帰国後は、③事後学習を通して現地調査の内容を振り返り、研究課題に分析・考察を加え報告書を作成した。

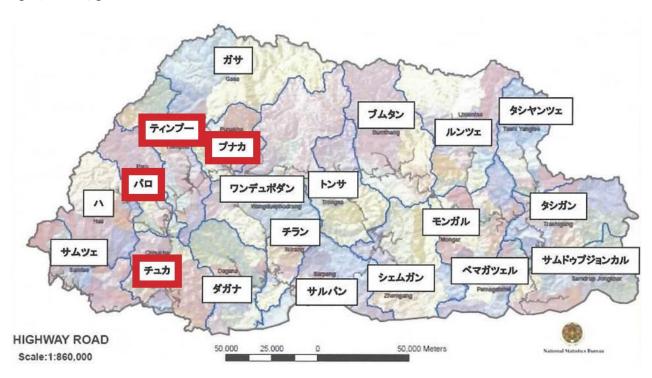
本年度は訪問国をブータン 1 ヵ国に設定し、2022 年 8 月渡航チーム(履修生 5 名)と 2023 年 2 月渡航チーム(履修生 5 名)の 2 チーム体制で始動したが、新型コロナウイルス感染症の影響等から、最終的には 2 月にまとめて現地調査を行うこととなった。スケジュール変更や渡航費の増大を受け 3 名が履修取消を行い、最終的に履修生は 7 名(学部 1 年 : 3 名、学部 2 年 : 2 名、学部 3 年 : 2 名)となった。現地調査の引率は平山講師と駒田アカデミック・アシスタントが行った。

【現地調査スケジュール】

	月日	活動内容
1	2月7日(火)	成田空港出発 バンコク・スワンナプーム空港到着
2	8日(水)	パロ空港到着 JICA ブータン事務所訪問 JICA ブータン事務所のナショナル・スタッフへインタビュー ティンプー市内散策/各自の研究活動(インタビュー等)
3	9日(木)	ゾンカ開発委員会訪問 ティンプー市役所訪問 伝統技芸院訪問 ブータン日本語学校訪問 ブータン日本語学校の生徒と交流 ティンプー市内散策/各自の研究活動(インタビュー等)
4	10日(金)	キリスト教の教会訪問 プナカ・ゾン訪問 高地牧畜民にインタビュー
5	11日 (土)	ファブラボ CST (王立ブータン大学科学技術カレッジ) 訪問 シク教の寺院訪問 プンツォリン市内散策/各自の研究活動(インタビュー等)
6	12日 (日)	ホームステイ先近隣散策 ホストファミリーと交流
7	13日(月)	西岡ミュージアム(農業機械公社/農業機械化センター)訪問 西岡チョルテン訪問 伝統舞踊の踊り手へインタビュー 王立ブータン大学パロ教育カレッジ訪問 パロ市内散策/各自の研究活動(インタビュー等)
8	14日(火)	タクツァン僧院訪問 国立博物館訪問

		パロ市内散策/各自の研究活動(インタビュー等)
9	15日 (水)	パロ空港出発 バンコク・スワンナプーム空港到着
10	16日 (木)	羽田空港到着

【訪問した県】



【履修生の所感(抜粋)】

- バンコクでのトランジットで宣言した目標は「自分の価値観をガラッと変えてくれるような経験をすること」だったが、ブータンでの日々はまさに人生が変わるような経験だった。毎日が新しい発見で、調査項目のナショナルアイデンティティや宗教に対してのイメージがガラッと変わり、豊かさとは何か、伝統とは何か、幸福とは何か、といったさまざまな問いが今でも頭の中をぐるぐると渦巻いている。
- ・ 自分の専門分野、地域、時代を超えて、全く新しい経験を積むことが出来たことに大きな達成感を 覚えている。研究内容については、やっとはじめの第一歩を踏み出すための、助走レーンが完成し たような場所にいることを痛感しているが、10 日間の実習を経て、資料だけでは分からない現地 調査の重要性に改めて気づかされた。
- ・ ブータンの文化に身を置き様々な人と交流できたこと、自分の日常を問いなおす契機になったことが、スタディーツアーに参加した大きな意義だと考えている。
- ・ 「伝統工芸における性別分業」という、非常に限定的なテーマで調査に臨んだが、自分が想像していたものとは全く異なる結果が得られ、調査を進めていくうちに他のテーマとの関連性を多く見つけることができた。特に、宗教・伝統とジェンダーの関係は、これから時間をかけて研究したいと思えるとても複雑で深いテーマだと気づくことができた。(中略)人間にとって絶対的な存在に

なり得る「宗教」と、人間の本質である「ジェンダー」が共生していくためにはどうしたらいいのか。一生かけて考えていく価値のある問いをブータンで与えられた気がした。

- ・ 私は、今回の実習で「自分の将来のヒントを見つける」という目標を立てていた。学問においても それ以外でも、この目標は達成されたと思う。初めて降り立ったブータンは、私の心を魅了し続け、 自分の中の新たな世界の扉を開け放してくれた。
- ・ ブータン人が仏教や伝統文化を大切にし、日常生活の中にも取り入れていることは事実であるが、 それと同時に日本に暮らす私たちと生活スタイルが変わらない部分も多く、事前調査段階では必要以上にブータンという地を遠いものとして捉えていたことを実感した。この気づきは実際に現地に行って、ホームステイをしたり現地の人に話を聞いたりすることが出来たから得られたものであり、ただの旅行では得られなかったものである。今後も研究を行う時にはフィールドワークやインタビューといった手法を用いながら、より深い考察が行える研究を目指したい。
- 自分の中にあった先入観や偏見を改めることができ、人生観や世界の見え方も変わった。
- ・ 今回の調査に参加して、自分の流暢ではない言語でインタビューすることの難しさを感じた。しか し、日本から研究のために来たことや調査内容を伝えると快くインタビューに回答していただく ことができて、インタビューをすることに自信がついた。
- ・ 私はこれまで資料や文献でしかレポートを書いたことがなかったため、今回の調査が私にとって 初めての現地調査だった。自分でテーマを考え、仮説を立てた上で、仮説を実証するために調査を 進めるおもしろさを感じられた。(中略)また、他の人の研究に同行することで、自分の研究以外 の分野の知識を深めることができたり、自分では思いつかないような体験をしたりすることがで きたのはとても良い経験だった。
- ・ 「国際協力を専門として学ぶ者として、学生のうちに一度は途上国を見に行こう」という思いの下でこのスタディツアーに参加したのだが、ブータンを見れば見るほど「途上国ってなんだろう」「国際協力は必ずしも必要なものではないのかもしれない」と思うようになってしまったという点で、自分がこれまで正しいと思っていたものを見失ってしまったように感じる。しかし、このような感情を持つことができるようになったのも、(中略)この実習で得ることができた良い学びの1つだと感じる。途上国とは何か、国際協力の意義とは何か、についてはすぐに答えの出る問いではなく、一生かけても見つからないものなのかもしれないが、これから先の授業や日々の生活の中で絶えず探し続けていきたいと思った。
- ・ 渡航前に立てた「言葉が通じなくても積極的に話しかけて意思疎通を図る」という目標はある程度 達成できたと感じている。(中略)とはいえ、自分の語学力はまだまだ完全すべきだと感じたため、 今後も語学学習に力を入れていきたい。



ブータン到着直後の履修生たち



JICA ブータン事務所



JICA ブータン事務所のナショナル・スタッフへの インタビュー



ゾンカ開発委員会訪問



キリスト教の教会でのインタビュー



ブータン日本語学校の生徒との交流会



ブータン日本語学校のみなさんと



ファブラボ CST 訪問



プンツォリン市内散策



スパーマーケットでの市場調査



ホストファミリーに話を聞く①



ホストファミリーに話を聞く②



ホームステイ先での夕食





王立ブータン大学パロ教育カレッジでのレクチャー



タクツァン僧院訪問

2. グローバル協力センター主催セミナー

2.1 持続可能な開発目標 (SDGs) セミナー

本セミナーは、「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成—女性の役割を見据えた知の国際連携—」事業の一環として 2017 年度より実施している。今年度は、SDGs 推進研究所の後援のもと、以下の通り計7回開催した(参加者:合計209名)。また各回の実施報告をグローバル協力センターのホームページに掲載した。

(1) 第19回持続可能な開発目標(SDGs)セミナー

【概要】

テーマ:「居場所づくりの現場から」

日 時:2022年6月20日(月) 13.20~14:50

講 師:笹間優衣氏(認定特定非営利活動法人カタリバ職員)

【履修生による報告】

本日のセミナーでは、NPO の現場起点の視点から、社会課題と NPO の特徴の関係、また NPO が 社会に与える影響について理解を深めることができました。特に印象に残った点は大きく 2 点ありま す。

第一に、認定 NPO 法人カタリバの掲げる「ナナメの関係」による共成長モデルには、あらゆる角度によるつながりが想定されるという点です。核家族化やコロナ禍による接触機会の減少を要因とするつながりの希薄化は近年より顕著にみられています。だからこそ、あらゆる関係性に変容しうるつながりのあり方によって、共に成長し、心を育むことが求められていると考えます。私自身も、今後

自分と周囲の人々との関係を再考すること で、より深くこの関係性づくりの意義や留意 点について考えたいです。

第二に、NPO の社会問題の捉え方という 点です。カタリバ(放課後の居場所支援施 設)では、社会課題の認識を起点として、複 数の課題を相互の関係性を意識しながら整理 することで、「居場所づくり」という一貫し たキーワードを導き出している点が印象的で した。この課題解決プロセスによって、多様



な背景とニーズをもつ人々にとっての1つの選択肢としてNPOが機能することが可能になっているのではないかと考えます。さらに、「居場所」に依存するのではなく、「意欲を育む」というアプロ

ーチには、営利企業とは異なる NPO の中長期的な物事の見方や人を重視したサービスのあり方が表れていると感じました。

一方で、NPOが単独でその課題に取り組むだけではなく、地域や行政、学校と相互に働きかけ合いながら連携しているという点も興味深いと感じました。NPOをはじめとする各アクターがその特徴を生かしながらも互いに補完し合うことで、同じ社会課題に取り組むパートナーシップを築くことが重要であると考えます。また、お話の中で講師の笹間さんが指摘された社会課題や現状を「自分ごと」として捉える過程の先には、このような社会の連携のカタチがあるのではないかと感じました。どのような社会課題に対し、どのような視点から、どのように関わり解決を目指したいのか、自分と社会の関係を見つめ直すことで、多様なアクターの中での関わり方を模索できると考えます。だからこそ、笹間さんのお話にあったように、自分の目指したい姿や未来を考え、言語化していくということを実践したいと思います。

現場の視点からその解決に向けた取組みや社会の変化を学ぶことで、NPOの役割への理解を深めるだけでなく、自分自身と社会の繋がりを考えるきっかけを得ることができました。本当に貴重なお話をありがとうございました。

(文教育学部言語文化学科グローバル文化学環3年 大津 琴音)

(2) 第20回持続可能な開発目標(SDGs)セミナー

【概要】

テーマ:「学生による社会起業の実践」

日 時: 2022 年 7 月 7 日 (木) 16: 45~18: 15 講 師: 高久翔伍氏(早稲田大学文化構想学部 4 年)

【参加学生による実施報告】

7月7日(木) 16:45~18:15、本学のグローバル協力センターが主催する第20回持続可能な開発目標(SDGs)セミナーが開かれました。「学生による社会起業の実践」と題された第20回のセミナーでは、早稲田大学文化構想学部4年生の高久翔伍さんが講師を務めて下さいました。オンライン形式で実施され、本学・早稲田大学内外から合計70名以上が参加しました。

講師の高久さんは、ソーシャルビジネスというアプローチから途上国支援に関わりたいと考え、現役大学生でありながらマレーシアで「大福屋さん」を起業したいという驚きの経験をお持ちのスーパー大学生。高校生までは途上国や国際協力に関心を抱いたことはなかったものの、大学に入学した

2017年にミャンマーを旅行し途上国に魅せられたことが、その後の活動のきっかけとなったといいます。そして、マレーシアの無国籍の子ども達への教育支援ボランティアを行う早稲田大学のサークル「ボルネオプロジェクト」を、代表として盛り立ててきました。活動する中でよりディープにマレーシアを支援したいと考えるようになった高久さんは、国内の難民支援企業でのインターンを経て、



2019年、「大福屋さん」を開店させます。事

業では現地の貧困層の人々を雇用することで、貧困層の子どもでも安心して公教育を受けられる体制 の構築に取り組んできました。

卓越した行動力と熱意のある高久さんですが、セミナーでは自身を「ミーハー大学生」と称し、あくまでも一人の一般的大学生として、ソーシャルビジネスの起業に至った経緯や試行錯誤の過程について、率直にまたユーモラスに話して下さいました。ソーシャルビジネスの難しさやコロナ禍という思わぬ事態による挫折といった経験談からは、成功という結果を求めることよりも、失敗を恐れずに挑戦と試行錯誤、軌道修正を繰り返すことの価値を痛感させられました。また、大福屋さん創業にあたって融資獲得のためのプレゼン等も経験してきた高久さんは、プレゼンテーション能力にも長けており、講義の内容だけでなく聴衆を惹きつけるプレゼンの技法についても多くを学ぶことができまし

近年、日本では若者の起業家精神育成の重要性が盛んに唱えられており、本学でもアントレプレナーシップ教育の授業等が行われています。現役大学生として海外での飲食店起業に取り組んだ高久さんを講師に迎えて実施された本セミナーは、本学の学生にとって視野を広げるための非常に有意義な学びとなりました。今後も、持続可能な社会の構築を考

た。



えるため、同世代の実体験から学ぶ機会を大切にしていきたいと思います。

(文教育学部人間社会科学科グローバル文化学環3年 太田 朝弓)

(3) 第21回持続可能な開発目標(SDGs)セミナー

【概要】

テーマ:「国際協力の現場から: JICA と UNICEF での教育、保健分野の協力について」

日 時: 2022年12月6日(火) 15:00~16:30

講 師:小島路生氏(国際協力専門家&一般社団法人 Think Locally Act Globally (TLAG) 事務局

長&トレイルランナー)

【参加学生による実施報告】

2022年12月6日(火曜日)の第21回SDGs セミナー「国際協力の現場から: JICA と UNICEF での教育、保健分野の協力について」では、国際協力専門家であり、NGO事務局長や金沢大学非常 勤講師も務めていらっしゃる小島路生さんにお話を伺いました。小島さんは、ご自身の学生時代の経験も含め、国際協力の現場のお話を詳しく語ってくださいました。

小島さんは、これまでJICA(独立行政法人 国際協力機構)やUNICEF(国際連合児童基 金)を通して国際協力の現場で多く活躍され てきましたが、大学時代は法学部に所属し、 国際的なことに関心はありつつも"国際協力"に は興味がなかったそうです。しかし、阪神淡 路大震災の復興ボランティアに参加した際の 無力感、学生時代にフィリピン学生と行った ワークキャンプ、ネパールでの国際交流事業



講師の小島路生氏

といった"現場"での活動を行っていく中で感じた"貧困なのにも関わらず総じて途上国の人が幸せで楽 しそうだ"というギャップなどがきっかけとなり、国際協力の道を目指すようになりました。

大学卒業後はアメリカの大学院へ留学。英語に苦労しながら国際協力に関する学びを深め、インドネシア・ジャカルタのユネスコ事務所でインターンを行うなど、忙しい毎日を過ごしました。その後、JICAの青年海外協力隊として中米・グアテマラで教育支援に携わりました。ここでは、小学校教員向けの算数研修や図書館の設立・改善に取組みましたが、スペイン語という語学の壁は大きかったそうです。

グアテマラでの活動の後、JICA の国際協力専門家として中米・ホンジュラスに赴任し、貧困地域・貧困層のみが罹患し苦しんでいるシャーガス病対策のプロジェクトに携わりました。ここでも、コミュニティ住民や他の援助機関など様々な関係者とのコミュニケーションが求められるなかで語学の壁というものがあり、さらに JICA 専門家としては"日本語"での文章作成能力も必要なのだ、と実感したそうです。

JICA 専門家としての活動を終えた後は、 JPO となり、UNICEFのインドネシア教育担当官として、インドネシアで2年ほど勤務しました。限られた環境の中で一生懸命に学ぶ姿を見せる子供たちを支えるため、特にインドネシアで問題となっている中途退学問題を解決するECD(Early Childhood

Development Program) という貧困地域のコミュニティ型就学前教育プログラムに取組みました。また、インドネシアの中でも開発が



質疑応答の様子

遅れているパプア州でも、"すべての子供"がよい教育を受けられることを目指す支援 EFA

(Education for All in Papua Province)を進めました。さらに、インドネシアで発生した震災時には、被害を受けた現地小学校の復興支援などにも携わるなど、様々な分野で貢献されました。
UNICEFでの活動を通して、自分が国連職員として働き続けたいのかどうか、自分の強みは何か、そして、自分が本当にしたいことは何か、といったことについて考えを深めることができた小島さん。「途上国支援の仕事も大切だが、日本人として日本に向き合う時なのでは」と感じ、富山県立山町で地域おこし協力隊になり、3年間、過疎地域の活性化に取組みみました。そして今、一般社団法人 Think Locally Act Globally (TLAG)を設立し、北陸を拠点とした地方の視点からの国際協力と「日本の地方と途上国双方の生日合い」による地域づくりに取り組んでいます。

このように国内外、様々な地域で"現場"を中心に活動された小島さんは、最後に重要なことを二点提示してくださいました。

一つ目は"自分一人では何もできなくても誰かと繋がればできることがある"ということ、二つ目は"international(国際)は local(地方)の集合体"だ、ということです。国際協力というのはその地域のローカルな部分に焦点を当てているわけで、しかし国際的な視点があるからこそそのローカルな部分に気付くことができる、つまり双方は密接に関係している、ということです。どちらかだけに着目するのではなく、どちらにも目を向けながら国際協力について考えていくことが求められているということです。

小島さんのように色々な"経験"を積むということは、簡単なことではありません。しかし、その"経験"からのみわかること、もたくさんあるでしょう。小島さんの「学生時代は本気で悩み、考えるよりも体感を。いろいろな経験(寄り道)をするのも大事」という言葉を胸に、学生時代にたくさん悩み、たくさん挑戦してみたいと思いました。

(文教育学部人文科学科2年 村上 桃菜)

(4) 第22回持続可能な開発目標(SDGs)セミナー

【概要】

テーマ:「SDGs とインフラ支援」

日 時:2022年12月13日(火)1.5:00~16:30

講師:小中鉄雄氏(埼玉大学研究機構研究推進室・レジリエント社会研究センター教授・お茶の

水女子大学 SDGs 推進研究所客員教授)

【参加学生による実施報告】

2022 年 12 月 13 日(火曜日)、第 22 回持続可能な開発目標(SDGs)セミナー「SDGs とインフラ支援」では、埼玉大学研究機構研究推進室レジリエント社会研究センター教授で本学の SDGs 推進研究所客員教授でもいらっしゃる小中鉄雄先生が講師を務めて下さいました。

本セミナーでは、インフラとは何か、インフラ支援の重要性やその実態について学ぶことができました。インフラと一言にいっても、実際には社会インフラや経済インフラなど多様な種類のインフラが存在し、幅広いものです。インフラを作る際にはただ作るだけでなく、いかに長く持続し価値を高めるかが重要です。インフラといった言葉はよく使われるものの、先進国



で暮らす私たちにとっては当たり前すぎて考える機会がなかなかないため、インフラの存在を改めて 実感することができる大変貴重な機会でした。

そんな本セミナーの中で印象的だったのが、インフラ支援の重要性とその難しさについてです。

インフラは道路の整備や女性専用車両の設置、排水処理など多様な分野で SDGs と関わっています。インフラの整備を行うと生産性が向上し、投資や貿易拡大へとつながるため、ビジネスの発展を導きます。ビジネスの発展は経済成長をもたらし、貧困削減へとつながることから、SDGs はリスクではなくチャンスである、と話してくださいました。そのため、インフラ需要は年々増加しており、成長を維持しながら貧困を撲滅しさらに気候変動へも対応するとなると、2030年までに26兆ドルもの資金が必要であり、インフラ投資への需要と供給では、年間8190億ドルものギャップが生じている状況です。さらに、インフラ支援を行う際には多額の資金が必要であるだけでなく、作った後の維持管理が大変、といったことが特に印象的でした。インフラ整備を行う土地を確保し、現地住民への理解も得て維持していくなど長期的な計画となり、現地の既存制度との連続性や長期的な信頼関係がなければ支援の継続は難しいなど、様々な問題があることが分かりました。インフラがもたらす経済発展など様々な影響力が魅力的な一方で、実現する難しさを感じました。

また、小中先生のお話の中では、インフラ 支援の良い面だけでなく批判的な意見も紹介 してくださり、様々な角度からインフラ支援 について考えることができました。インフラ には巨額の資金が必要であり、その資金は融 資により提供されるため、開発途上国にとっ ては融資額が増え、返済が負担になってしま う懸念があります。また、現地に見合ったイ ンフラになっているのかどうか、という観点 も重要です。そのような様々な問題も学ぶこ



PPPスキームの基本構造についてお話を伺う

とができ、インフラ支援についてより深く考えることができました。

今回のセミナーでは、インフラについての基本的な知識から成功例・失敗例までを学ぶことで、た だインフラ支援を行えばいいわけではなく、様々な問題点を捉えることが重要、ということを考える ことができ、とても勉強になりました。貴重なお話をありがとうございました。

(文教育学部グローバル文化学環2年 齊藤 美瑛)

(5) 第23回持続可能な開発目標(SDGs)セミナー

【概要】

テーマ:「国際協力と開発を考える-ブータンの開発課題と日本の協力を通じて-」

日 時:2022年12月15日(木)1.5:00~16:30 講 師:須藤伸氏(JICA ブータン事務所企画調査員)

【参加学生による実施報告】

2022年12月15日(木曜日)15時~16時30分、本学のグローバル協力センターが主催する第

23回持続可能な開発目標(SDGs)セミナー が開かれました。今回のセミナーでは、 JICA ブータン事務所企画調査員の須藤さん を講師にお招きし、ブータンの開発課題か ら、ブータンに対する日本の協力の現状やブ ータンの発展について理解を深めました。

まず、日本とブータンの関係を中心にお話 を伺いました。ブータンは国民総幸福量



講師の須藤伸氏

(GNH) という尺度を用いて国全体の方向性を決定しています。GNH は SDGs の尺度と似ている側面を持っており、4 つの柱・9 つの項目をバランスよく達成する事を目指しています。日本はOECD に加盟する二国間援助国の中で最大のパートナーで、ブータンに様々な協力をしています。JICA は農業・インフラ整備・保健の 3 つの柱に重点を置いて協力をしており、王室からの名称授与を受けた王立感染症センター建設計画も JICA が協力しています。このように、日本とブータンは国際協力という側面で多くの関わりのある国であるということがわかりました。

次にブータンの開発課題についてお話を伺いました。ブータンではGNHの達成を軸に政策の方向性が決定されていますが、現在若年層の失業率向上や都市と農村の格差拡大が進んでおり、若者の間で社会の閉塞感があるそうです。都市は若者にとってチャンスのある場所でしたが、実際に都市で働いている若者は多くの困難に直面しています。一方で、都市部よりも貧困率の高い農村の若者は今の生活に満足しているそうです。仕事の充実感



やコミュニティ内での若者の居場所があることに加え、農村部での道路の開通がより生活の満足感を高めています。都市部の方が貧困率が低く識字率が高い、農村部の方が貧困率が高く識字率が低いという調査結果だけでは、人々が心豊かな生活を送っているか、生活に満足し充実感を持っているかという実態は把握できないことがわかります。

これらのことを踏まえ、発展を捉える多面性について考えました。GNH の理念に沿って開発を促進し、高い経済成長を達成したものの、若者の生活への満足感や失業者問題は改善されているとは言えない現状です。SDGs や GNH のような多面性のある指標だけでは見えない生活への満足感や心豊かな生活の実態があるということがわかりました。ブータンにこれからどのような協力が必要なのか、発展とは何か、深く考えさせられる講演会でした。本当に貴重なお話をありがとうございました。

(文教育学部人間社会科学科グローバル文化学環3年 石田 優花)

(6) 第24回持続可能な開発目標(SDGs)セミナー 【概要】

テーマ:「海外の日系社会・日系社会支援」

日 時:2022年12月20日(火) 9:00~10:30

講師: 石森和磨氏 (アリストテレスの窓代表・JICA 海外協力隊経験者)

【参加学生による実施報告】

2022年12月20日(火曜日)、アリストテレスの窓代表の石森和磨氏をお招きし、第24回持続可能な開発目標(SDGs)セミナー「海外の日系社会・日系社会支援」が開催されました。石森氏はJICA(独立行政法人国際協力機構)の海外協力隊(日系社会ボランティア)としてブラジルで活動したご経験を持ち、現地で異文化と出会って対話を重ねる中で得た生き方の新たな視点をお話いただきました。



講師の石森和磨氏

ブラジルは、中南米で最大の人口・面積を有する国として、また日本を除いた国の中では最も日系人が多く住む国として知られています。日系人の祖先は日本から渡った日本人であるので、私は、日系人は日本人と文化もよく似ており、日本人の魂が色濃く残っているという偏見をもっていました。しかし、石森氏のお話や、後日授業の一環で訪れたJICA海外移住資料館での学びを経て、日系人は日本人と同じルーツを持つが全く異なる文化を持つ、一つの「人種」に近いのだということを感じました。その背景には、第二次世界大戦によって日本文化が断絶されたことのみならず、ブラジルの人種の多様性や移住時の日本政府の介入の希薄さがあり、独自の文化を形づくっているのだ、と考えます。

「日本のパラレルワールド」ブラジルで石森 氏が感じた最大の日本との違いは、今を生き るか、未来を生きるか、でした。先を見通し 未来を案じる日本人は、経済的な問題を不安 視したり、知識や成功ばかりに囚われたりし て、自身の幸せの機会を逃している。しか し、一寸先は闇の現代、経験こそ財産であ り、中でも「異質」と出会って対話すること は自身の視点を大きく変化させる、そしてそ の先に調和をうむ。石森氏のお話は私たちに



会場の様子

とっての「異質」との出会いであったと共に、言葉だけの出会いで満足せず「今」感じたことを大切に、まずは経験へとつなげる、という意識をうみました。「成果」と呼べるものを追い求めるあまりに踏み出せていない、自分自身の中に眠る一歩を見つめる機会となりました。

JICA 海外移住資料館の視察とも合わせ、日系人に関して得た気づきは、私にとって日系人と言う存在は「近くても遠かった」ということです。先述の通り、私にとって日系人は、そのルーツ故、日本人にほど近い存在だ、と思い込んでおり、また意識の中では過去の出来事でした。しかし、日系人は「日本人」と並ぶようなある種の人種と捉えた方が認識としては近いものがあり、また現在も変化しながら続いている、独自の文化をもつ存在でした。また、現在は他国の問題として、また不幸な印象を持たれがちな「移民」は、日本人にも密接なかかわりのあるものでした。これら2つの出来事を関連させて考えたことは今までの私にはなく、また注目されることも多い現在の移民問題については関心を持っていましたが、日本も密接に関連した過去の移民問題について考えることはほとんどありませんでした。これらを関連させ、今一度考えてみると、解決を図られるべきは移民そのものではなく、やむを得ず祖国を抜け出さなければならなかった事情そのものであるのだ、と学びました。また、移民を他国の惨状として見るのではなく、1つの文化として向き合い、対話を重ねながら双方を尊重していくことが必要であること、メディアなどの情報は第三者の目線を介しており、自分自身の五感で経験し感じることに勝ることはないのだ、ということも学びました。

これまでは、知識を取り入れることが多かったように感じますが、大学という自ら機会を探し求め 得ることのできる環境で、これまで以上に"今ここ"で"感"じている自分自身を大切に、物怖じせず経 験を積んでいこう、と改めて思いました。

(生活科学部心理学科2年 小川祐奈)

(7) 第25回持続可能な開発目標(SDGs)セミナー

【概要】

テーマ:「JICA の教育支援」

日 時:2022年12月20(火) 15:00~16:30

講師:太田美穂氏(株式会社コーエイリサーチ&コンサルティング主席コンサルタント)

【参加学生による実施報告】

2022 年 12 月 20 日(火曜日)、第 25 回持続可能な開発目標(SDGs)セミナー「JICA の教育支援」では、株式会社コーエイリサーチ&コンサルティングの主席コンサルタントでいらっしゃる太田美穂氏が講師を務めて下さいました。

今回のセミナーでは、モザンビークにおけるJICAの教育分野協力プロジェクトとはどのようなものか、そしてそのプロジェクトにおけるコンサルタントの役割とは何かについて学ぶことができました。

私はまず、モザンビークの教育に関して、中等教育の純就学率、総就学率の低さに衝撃を受けまし

た。その要因は様々ですが、学校に行けない、 行くことのできる学校がないといった要因だけ でなく、質の低い教育による中退率の高さも深 く関わっているようでした。教育の場を提供 し、教材を提供する支援に加え、教育や教員の 質の向上を視野に入れた支援を行うことの重要 性に改めて気付かされました。



本セミナーで伺った JICA の教育分野協力プ

ロジェクト(略称 PRICEP)は、この教育や教員の質の向上につながるものであり、教育カリキュラムから学習教材、授業、学力測定という学習における一連の流れをプロジェクトデザインに取り入れた総合的なアプローチです。このモザンビークにおける初等算数・理科の学びの改善を目指すPRICEPは、モザンビークの教育人間開発省と連携し、2021年3月から2027年2月まで実施されています。プロジェクトの流れとしては、まず日本の学習指導要領を参考にし、モザンビークにおける教育カリキュラム・プログラムを改訂します。その後、改訂したカリキュラムやプログラムに準拠し、初等算数・理科の教科書と教員用の指導書を改訂します。そして、この改訂された新しい教科書で授業が行えるよう、現職の教員や初等教員養成校学生を研修し、指導力の向上を目指します。最後

ンを作成します。こうして、学習における一連の流れ(①カリキュラム ②教科書・学習教材 ③授業 ④学力測定・評価)を根底に支援を行い、更なる教育の質の向上を目指して、このサイクルを回り続けるのです。

に、適切な学力測定・評価が行えるよう、初等算数・理科の試験問題の作成や採点方法のガイドライ

今回のセミナーでは、現行版の算数の教科書と改訂版の教科書を実際に比較して見せていただき、その違いが特に興味深かったです。現行版は、段階を踏んで理解を深めるというよりも、多くの問題を解くことに重点を置いているようでした。そのため、一度つまずいてしまうと授業についていけなくなるだけでなく、教員にとっても、この教科書で分かりやすい授業を行うことは難しいように思えました。しかし、改訂版は、教科書を読ん



JICAの教育分野の取り組みについてお話を伺う

だだけでも理解ができるよう、丁寧に計算の手順や例題が示されており、難しい問題でも自力で解くことが可能となっていました。これまで私は、教材が揃っていればよい、とばかり考えていましたが、教科書の比較をすることで、教科書の内容も教育や教員の質を向上させる上で重要な役割を果たしていることに気づかされ、PRICEPのような教科書を見直し、改善していく支援の重要性を痛感しました。

今回のセミナーを通して、自身の「当たり前」を見直し、広い視野で教育支援のあり方を考えてみることができました。また、コンサルタントといった教育分野の支援に関わる様々なアクターについて学ぶことができ、興味深かったです。貴重なお話をありがとうございました。

(文教育学部人文科学科2年 古瀬桜子)

(8) **第26回持続可能な開発目標(SDGs)セミナー** 【概要】

テーマ:「コオロギが地球を救う?地球と生命を健やかに。コオロギで創るサステナブルな食の未来」

日 時:2023年1月30日(月) 16:40~18:10

講 師: 葦苅晟矢氏 (株式会社エコロギー 代表取締役 CEO)

【参加学生による実施報告】

2023年1月30日、株式会社エコロギー代表の葦苅晟矢様をお招きし、第26回持続可能な開発目標(SDGs)セミナー「コオロギが地球を救う?地球と生命を健やかに。コオロギで創るサステナブルな食の未来」を開催いたしました。葦苅様は2017年、早稲田大学大学院先進理工学研究科在学中に株式会社エコロギーを設立され、2019年にカンボジアに移住しコオロギ研究・量産体制を確立。同年「Forbes 30 Under 30 Japan」に選出され、現在はカンボ



3,30

ジアと日本を往復しながら、カンボジアでの研究・ 生産拠点体制の強化と日本でのブランディング 強化・認知度向上施策を同時並行で統括されています。昆虫食としてのコオロギの魅力や会社設立の きっかけ、カンボジアでの事業の様子をご講演いただきました。

人口増加による食料危機が危惧される中、環境負荷が小さくエコな代替タンパク質として昆虫食が注目されています。昆虫食としてのコオロギは、良質なタンパク源、CO2排出量の少なさ、生産効率の良さが特徴です。葦苅様は大学在学時にコオロギに可能性を見出され、まずは自宅で、そして規模が大きくなると日本でレンタルスペースを借りてコオロギの飼育を始められました。冬季は気温の低い日本では数を増やすことに限界があり、より暖かい候補地を模索された結果選ばれたのがカンボジアでした。カンボジアでは虫が日常的に食べられていて、街中にはコオロギの銅像があり、農家の副業としてコオロギが育てられているなど、コオロギを育てるには理想的な環境でした。

カンボジアでのコオロギ生産では、コオロギのエサには食品工場でのフードロスを活用し、現地の農家が副業として育てたコオロギを買い取っています。コオロギは商品化までに45日しか要さないため、年に8回の現金収入の機会が得られます。実際に、葦苅様が関わっておられる農家では、コオロギを育て始めたことで収入が増え、子どもが継続的に学校に通えるようになるなどの変化があった、とおっしゃっていました。現在は主に他のASEAN諸国への事業展開を進められたり、病院食の文化がないカンボジアの妊婦の栄養改善に取り組んだりしていらっしゃいます。食料危機の解決のみならず、フードロスや所得格差、栄養状態といった現地の社会問題にも貢献するビジネスモデルに非常に心惹かれました。

昆虫食への抵抗感が強い日本では、お菓子に 粉末状の昆虫を混ぜた製品を販売することで、 昆虫食のハードルを下げる試みがなされています。しかし、代替タンパク質として食事に取り 入れるまでには浸透しておらず、このままでは 一過性のブームで終わってしまうのではない か、と想定されています。昆虫食が日常の食事 の選択肢の1つとして選択されるようになるに は未だ課題があります。



会場の様子

社会問題に貢献する方法として、社会起業家に興味があります。市場のニーズに対応する「モノ」や「サービス」を提供することで、お金を循環させながらより良い社会を築く持続的な社会貢献ができると考えています。信頼関係をどのように築くのか、誰もやったことがない新しい道をどのように切り開くのか。社会起業家として活躍されている葦苅様の理念や困難を直接お聞きして、非常に貴重な時間を過ごすことができました。

(文教育学部人間社会科学科1年 リップル アメリ)

2.2 2022 年度ブータン連続セミナー

本セミナーは、①南アジアに位置するブータン王国を巡る諸相に触れること、②それらから開発政策や国・地域の在りかたを考えることを目的とした、全 20 回のオンラインセミナーである(参加者:合計 1,000 名)。日本ブータン研究所との共催という形式を採り、同研究所が 2013 年 4 月より続けているブータン勉強会(第 151 回~第 170 回)を兼ねた。

ブータンは総人口 70 万人ほどの小国であるが、政府はその主体性・独自性を保つ努力を怠らずに国づくりを進めており、経済成長一辺倒の開発の在りかたを問い直す国として世界各国から注目を集める存在となっている。特に前国王が提唱した GNH (Gross National Happiness、国民総幸福)という

開発哲学は広く知られ、ブータンがメディアで紹介される際は、たいてい「幸せな国」や「世界一幸福な国」といった枕詞が付せられる。一方で、都市への人口の一極集中や貧富の差の拡大等近代化に伴って顕在化しはじめた問題も多く抱えており、近年はそうした点が注目されることも増えている。このような特徴を有するブータンから学べることは多いと考え、本セミナーを企画した。

毎回ブータンを扱った国内外の新旧映像作品を取り上げ、映像作品の視聴、発表者(コメンテーター)からの簡単な解説、質疑応答及び意見交換という流れで実施した。取り上げる映像作品の選定にあたっては協力団体である海士ブータンプロジェクトの学生と協働し、各回のテーマに偏りが生じないようよう工夫した。また、協力団体の日本ブータン友好協会には、主に広報に関して協力をいただいた。

(1) 2022 年度第1回ブータン連続セミナー

【概要】

日 時:2022年4月9日(土) 14:00~16:00

題 目:「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ ⑪

- 『アジア食紀行』「コウケンテツが行くブータン(前編)」(2012年) -」

発表者:須藤伸 氏(日本ブータン研究所研究員)

平山雄大 (グローバル協力センター講師)

参加者:約70名

【参加者からの感想・コメント(抜粋)】

- ・ ブータンの食文化について初めて知ることができてとても興味深かったです。また、ブータンに関 して知識や経験を持っている方が多く、質疑応答もとても面白かったです。
- ・ ブータンの食文化の実態を知れてよかった。激辛料理以外にも多文化的な料理があることを知れた。
- 動画に加え、現地の日本人スタッフさんの解説があることでリアルなお話を聞けたことが良かったです。
- ・ 今回は「食文化」という親しみやすい話題だったこともありますが、コウケンテツさんの番組も面白く、また須藤伸さんのお話もパワーポイントを使った大変わかり易い解説で、興味が増しました。 コウケンテツさんとブータンのステイ宅の方とのやり取りも面白かった。
- ・ 延長戦の議論が充実していてとても勉強になりました。
- 知りたかった情報満載でした。
- ・ 雰囲気が堅苦しくなく、楽しい。
- ヤクは肺までしっかり料理するという話。味は想像できませんが、すごいと思いました。
- ・ 須藤さんの解説の中で、ブータン料理の特色がいくつかにまとめてスッキリと書かれていたのが とてもわかり易く、また印象に残りました。地元の人たちが実際に様々な料理を作る様子がじっく り見られてとても新鮮でした。
- ・ 食文化における近隣の文化圏との比較や、歴史的な影響関係のお話が特に興味深かったです。

- ・ 限られた時間の中で多くのコメントや質問に対応して頂かないといけないので、今日のように参加者の中でそれについてご存知の方が適宜答えてくださったのが良かったです(全員宛にして下さっているので、それを私たち参加者も読むことができます)。
- ・ 平山先生のセミナーの進め方が雰囲気よく、とても好きです。今年度もよろしくお願いいたします。





(2) 2022 年度第2回ブータン連続セミナー

【概要】

日 時:2022年4月23日(土)1.4:00~16:00

題 目:「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ ②

- 『アジア食紀行』「コウケンテツが行くブータン (後編)」(2012年) -」

発表者:須藤伸 氏(日本ブータン研究所研究員)

平山雄大 (グローバル協力センター講師)

参加者:約65名

- 知らなかった料理を知ることができた。
- ・ 気さくな発言、楽しい会話、面白く拝聴させて頂きました。
- ・ プナカやブムタンの家庭料理を知ることができて楽しかったです。
- 須藤さんのお仕事等の、専門に関するお話も聞きたいです。
- ・ 料理から現在の食に関する事情まで興味深かった。
- チャットで発言しやすい雰囲気だったのが良かったです。
- ・ ブムタンには行った事がなかったので文化や食文化がとても興味深かったです。また西ブータン、 東ブータン、南ブータンの違いも興味深くておもしろかったです。
- ・ 参加者のいろいろな意見を知ることができた。
- 新たな知識がたくさん得られた。
- ・ 広大な農地に恵まれているブータンが、食料自給率50~70%というのが驚きでした。
- ・ 高橋先生の「関連諸言語の語彙比較」はツボでした。国の壁を越えた研究の進展を望みます。
- ・ 全部面白いので、楽しみにしております。

- いつもありがとうございます。ぜひ、今後も続けていただきたいです。
- ・ 地方にいても参加できてありがたいです。
- ・ 平山先生の話し方が好きです。
- 毎回、楽しみにしています。トピックスとしてコロナ状況なんかも伺いたい気がします。
- ・ 今回のように、後で参照できる(じっくり読める)資料をダウンロードできるかたちでご提供いた だけるととてもうれしいです。
- 貴重な映像と懐かしい風景が見られて嬉しかったです。





(3) 2022 年度第3回ブータン連続セミナー

【概要】

日 時:2022年5月14日(土)1.4:00~16:00

題 目:「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ ⑬

- 『地球バス紀行』「遙かなるヒマラヤ 極彩色の祭りへ/ブータン」(2016年) -」

発表者:小島誠二 氏(日本ブータン友好協会会長)

平山雄大 (グローバル協力センター講師)

参加者:約60名

- 映像でブータンの雰囲気がよくわかった。補足説明もしてくださったので学びになりました。
- 初めて参加しましたが、映像を視聴しながらの解説でわかりやすかったです。
- 長距離バスについての事情をいろいろと知れた。
- ・ 今回使った映像の「踊り」「衣装」などの話が少なかったのが少し残念でした。でも7月にあるとのことですので、楽しみにしています。
- ・ 枠にとらわれない解説。平山先生のトヨタコースターへの思い等、肌感覚として伝わってきました。
- ・ 平山先生、高橋洋先生、小島様の解説が興味深い。司会の学生さん(ですよね)も頑張っていらして他の学生さんの励みになると思います。
- ・ 視聴映像、コメント、それから第2部の掘り下げ、それぞれとても興味深く、楽しませていただきました。

- ・ 貴重な映像を拝聴し、また平山様の解説・コメント及びその後、雑談のような意見交換で、深堀し た内容をお聞きでき、ありがとうございました。
- ・ 専門家の方も(恐らく)多数参加なさっている中で、こんな素人が参加していいのだろうかと毎回 思っていますが、私にとっては、新しいことを知ることができてとても楽しい時間になっています。 回によって、料理だったり、織物だったり、王位継承のことだったり、とテーマが異なっているの も興味を引かれるところです。
- ・ セミナーがほぼ 2 週に 1 回ってかなりのハイペースでただただ尊敬の念です。続けることにも重要な意味があるような気もするので、来年度はもう少しだけスペースアウトしながらでも良いのかな、、、と勝手ながら。その理由は内容が素晴らしすぎて、開催されるなら全部出たいからです!!





(4) 2022 年度第 4 回ブータン連続セミナー

【概要】

日 時:2022年5月28日(土) 14:00~16:00

題 目:「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ ⑭

- 『地球バス紀行』「ティンプー発 ツルが舞い降りる谷へ/ブータン」(2016年) - 」

発表者:表雅子氏(プレイヤーフラッグスツアーズ)

平山雄大 (グローバル協力センター講師)

参加者:約55名

- ・ 現地で暮らす方の情報は貴重でした。
- ・ 平山先生のイントロダクション・映像・表さんのコメントが互いに補完し合ってバランスが良く、 それぞれとても興味深いものでしたので。写真をたくさん見せてくださるのも楽しいです。
- ・ ブータン観光の、会社側のお話を聞けて良かった。
- ・ 表様のとてもわかりやすいコメントもあり、まだ行ったことのないブータン (とくにポブジカ!) に行ってみたくなりました。第2部も充実した内容でとても興味深く聴講させていただきました。
- ・ 「ブータンの人たちは、皆さん色々な言語を話すので、相手の言語がつたなくても聞こうとする姿勢が強い」という話が印象に残りました。

- ・ ブータン在住で旅行業に携わっていらっしゃる表さんのお話はとても具体的でしたし、ブータンの家族の実際の様子を少しでも知ることができて大変おもしろかったです。
- ・ 公共放送の番組を参加者で見て意見交換をする、自由に質疑するという今のやり方は、一つの方法 として、良い。同じものを見て、皆で意見交換ができる。くだらない質問も気軽にできるのは、メ リットです。
- ・ 平山さんもおっしゃっていたように、回を重ねるごとに山本さんのナビゲーションが向上してい くのが分かります。
- ・ いつもながら私のような初心者が参加していいのかと思っていましたが、平山先生や山本さんが 再度、「初心者向け&素朴な質問でも OK」と言ってくださったので、安心して参加することがで きました。回答して下さっている方がどんな方々なのかわかったのも良かったです。山本さんはま だ2年生になったばかりなのに本当にしっかりしていらして素晴らしいです。





(5) 2022 年度第5回ブータン連続セミナー

【概要】

日 時:2022年6月18日(土)1.4:00~16:00

題 目:「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ ⑮

-『DW Documentary』「Bhutan: Change Comes to the Happy Kingdom」 (ドイツ・2020 年) −|

発表者:高橋洋 氏(日本ブータン研究所研究員/『地球の歩き方 ブータン』編集者)

平山雄大 (グローバル協力センター講師)

参加者:約55名

- ・ とても映像が良かった。説明も聞けて良かった。
- ・ ブータンの僧について映像とともに知ることができたので良かったです。
- 映像も良かったし、内容も興味深かったです。
- ・ ブータンの教育制度の改革について少し関心がありますが、その中で僧院教育については、以前からよく理解できないところがいろいろあります。このドキュメンタリービデオは、柔らかいタッチ

で人間的な情感を描写することで、その問題点を明らかにしているように受け取れました。

- リアルなブータンを知ることが出来た。
- ・ 冬虫夏草の採取の様子は印象深かったです。
- ・ フラワービジネスの件は、初めて知りました。これぞ Changing Bhutan ですね。
- ・ 冬虫夏草、僧院の事情などが興味深かったです。
- ・ ブータンの変わりゆくところ、変わらないところ、などに関するお話もとても参考になりました。 …というか、非常に納得しました。
- ・ 貴重な映像と詳しい解説ありがとうございました。
- ・ 今年度分すべてのセミナーへ、一度に登録できれば便利なのですが。
- ・ ブータンの映像を見る度に、ブータンという国に興味がわきます。毎回、貴重な映像と説明をあり がとうございます。
- ・ 予告をしっかりして下さり、感謝しています。
- ・ 毎回、非常に勉強になります。ただただ感謝しています。





(6) 2022 年度第6回ブータン連続セミナー

【概要】

日 時:2022年7月2日(土) 14:00~16:00

題 目:「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ ⑯

- 『BS 世界のドキュメンタリー』「ブータン サッカー少女の夢」(2019年) -」

発表者:平山雄大(グローバル協力センター講師)

参加者:約35名

- ・ 具体的な日常生活が見られた。
- ブータンの現実の社会を観察できる。ニュースより情報量を持てる。
- 現代のブータンの若者、それも女の子たちの生活が描かれていて興味深かった。
- こんなに本格的に女子サッカーに取り組んでいることに驚きをもって見ていた。

- ・ 女子サッカーの話はそれなりに面白かったが、同性愛の話はあまり興味が湧かなかった。
- ブータンの若者の様子を垣間見ることができて興味深かったです。
- ・ リアルなブータンの子ども達の想いや様子が見れたので興味深かったです。
- 新たな学びがありました。スポーツ事情、性の多様性等。
- ・ 子どもたちがそれぞれの人生を作りたいと心に思っている時、国の教育方針は、その子どもたちの 心に、答え、指針をだせているのだろうか。
- ・ 女の子たちのその後の平山さんの解説が印象に残った。
- サムツェやゲレフの街並みが興味深かった。
- ・ ブータンがイギリスに攻められて平地を失った頃の話が面白かった。
- ・ ブータンのいろいろな側面を見れて勉強になりました。
- ・ 日本と違って設備や環境も整わない中で、大好きなサッカーに懸命に取り組む様子に心を打たれました。
- 性の多様性に関することがとても興味深かったです。
- ・ 平山さんの解説とても良いです。
- いつも楽しみにしております。





(7) 2022 年度第7回ブータン連続セミナー

【概要】

日 時:2022年7月16日(土)1.4:00~16:00

題 目:「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ ⑰

- 『アジア染織紀行』 「古の朱を求めて ブータン・ラディ村」(1998年) - L

発表者:都甲由紀子 氏(大分大学教育学部准教授)

平山雄大 (グローバル協力センター講師)

参加者:約45名

【参加者からの感想・コメント(抜粋)】

・ 多分?!視聴者の我々だけでなく、ブータンの染織業界にとっても今や貴重な映像とそれに関係 するお話で興味深かったです。

- 知らないことが山盛りになっていて楽しかった。
- ・ 原始的な染料製造から衣服になるまで全部が見られてとても興味深かった。
- ・ ラックの存在はブータンに行ってから知りましたが、実は身の回りにあったのか...。面白い発見で した!
- ・ まったく知らなかった染色の世界をわかりやすく解説していただき、とてもおもしろかったです。
- チャットでの質疑が活発で面白かったです。
- ブータンの知る人ぞ知るコアな情報が知れるのがとてもありがたいです。
- ・ ゴやキラを製作する過程が非常に複雑で感心しました。
- ラックのことでこのように話が広がるとは、深いですね。
- ラックは織物だけの話だと思っていたのに、こんな身近なところで摂取していたことに驚きました。
- ・ ラックカイガラムシという生物が存在し、それが国境を越えて私たちの人間生活に色々使われているという事実に感動しました。
- ・ ラック染めの話やキラやゴの価値についてが印象に残りました。
- 秋からブータンに行くので、現地での様子や調査など協力できることがあればぜひしたいです。
- たまのブータンについてのセミナーは私のエネルギーになります。ありがとうございます。
- ・ いつも楽しく聴講させていただいています。ビデオ視聴中は、チャットのコメントを見たり、質問を記入したりすると、見逃し聞き逃しがありそうなので、ひかえています。後半の質問コーナーで、司会進行の山本さんが、ていねいにチャットの内容を追っていただいているのがとてもよいです。
- 毎回とても勉強になります。ありがとうございました。





(8) 2022 年度第8回ブータン連続セミナー

【概要】

日 時:2022年8月13日(土)1.4:00~16:00

題 目:「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ ®

- 『School Among Glaciers』 (邦題:『氷河を越えて』) (ブータン・2004 年) - |

発表者:高橋洋 氏(日本ブータン研究所研究員/『地球の歩き方 ブータン』編集者)

平山雄大 (グローバル協力センター講師)

協力:海士ブータンプロジェクト、日本ブータン友好協会

参加者:約40名

【参加者からの感想・コメント(抜粋)】

- ブータンの日常生活模様が見れた。
- ・ ドキュメンタリー『氷河を超えて』と映画『ブータン 山の教室』の違いを発見できた。
- ・ 当時のブータンの地方の学校事情を垣間見ることができて、興味深かったです。
- ・ 2004年のルナナの様子を映像で見せていただけて興味深かったです。
- ・ 映画を先に観て感動していたのですが、今回のドキュメンタリーは飾ったところがなくて個人的 には好感が持てました。
- ・ 地方の生活の良さについて教えてくれている話が素敵でした。
- ・ 先生が生徒の身の回りの世話や衛生面まで見るところ。また、先生自身が学校に来させるよう家族 を説得している場面が印象的でした。
- ・ 先生が教室に入って来ると(号令もなしに)子どもたちが一斉に立ち上がるところ、また先生が座っていいと言うと生徒たちが"Thank you, sir."というところ。学校に行かせない理由を親御さんが述べているところ、先生が身体を清潔に保つことについて教え子どもたちの爪や手を見て助言しているところ、生徒の髪を切ってやっているところなどが印象に残っています。
- 教師としての彼はとても真面目な人で好感が持てます。ムチを捨てさせたシーン、アーミーナイフを1人の男の子にあげたシーンが印象的でした。
- ・ 教育への価値観の変化について、の話が印象に残った。
- 毎回、ブータンの映像視聴および解説が楽しみです。
- いつも興味深い話題をありがとうございます。
- ・ とてもよい機会を与えて下さり、感謝しています。
- 毎回とても勉強になります。ありがとうございました。





(9) 2022 年度第9回ブータン連続セミナー

【概要】

日 時: 2022年9月10日(土) 1.4:00~16:00

題 目:「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ ⑲ — 『Yonten Gi Kawa: Price of Knowledge』

(邦題: 『学びへと続く道』) (ブータン・1999年) -」

発表者: 津川智明 氏(元 JICA 専門家(地方行政))

平山雄大 (グローバル協力センター講師)

参加者:約55名(参加申込:79名)

【参加者からの感想・コメント(抜粋)】

- ・ 1999 年当時の教育の状況が分かった。
- ・ 津川さんの話を伺えてよかったです。ドキュメンタリー映画もステキでした。
- ・ 多方面のお話しを聞くことが出来、為になりました。
- ・ 地方の生活と教育環境がよく分かりました。
- ・ 毎回様々な映像作品を見せてくださり、その回ごとに違ったコメンテーターの方のお話も聞くことができて、とても楽しく参加させて頂いております。また素人の素朴な質問にも一つ一つ丁寧に答えてくださり、有り難く思っております。とても雰囲気の良い会で、毎回楽しみにしています。
- ・ 映像が素晴らしかった。興味深い場面がたくさん出てきてこの先自分で調べてみようと思うこと がたくさんありました。
- ・ 以前見たドキュメンタリーを再度見ることができ、しかも解説や質疑を受けて内容理解が深まった。
- ・ セミナーの司会者、コメンテーターが、参加者の質問などに対して、とても丁寧に説明をされていました。
- ・ 仏教が生活の中心にあるブータンの方々の暮らしが分かりました。子どもたちの学びに対するモ チベーションの高さが日本と違うなと感じました。
- ・ いつも興味深い映像とお話しをありがとうございます。
- ・ 農家の生活水準についてお話を伺っていて、今日では当時からどのように変わっているだろうか、 また当時の生活レベルとしてはどれくらいか、想像することができた。
- ・ 要望というわけでも有りませんが、現在の、ブータンの女性たちの生き方や、考え方なども伺って みたいです。

取り上げる映像

『Yonten Gi Kawa: Price of Knowledge』 (プータン・1999年)

(邦題:『学びへと続く道』)

- ✓ ウゲン・ワンディ監督作品
- ✓ 片道2時間半かけて学校に通う少年シェラブを 撮影したドキュメンタリー
- ✓ 20世紀末の中部の農村の暮らし



取り上げた映像の紹介

監督

ウゲン・ワンディ

- ウゲン・ワンディはブータン初の映画監督である。1989年に『ガサ・ ラマ・シンゲ』を制作し、その後ドキュメンタリーに進出、ブータン におけるドキュメンタリー映画制作の父と呼ばれるようになる。
- 彼のドキュメンタリー映画『Price of Knowledge』、『Price of Letter』は数多くの国際映画祭で上映され、数多くの賞を受賞している。
- インドのプネーにある映画テレビ学院 (Film and Television Institute) で映画を学び、卒業。自身の映画会社を設立し、教育や企業のビデオを制作している。
- 『Price of Knowledge』は彼の最初のドキュメンタリー映画で、 タリアのヌオロ国際映画祭で賞を受賞し、サンフランシスコ国際映画祭では功労賞を受賞した。

iffi : https://www.beskopbhutan.com/filmmakers/ugyen-wangdi/

出州: http://asiaplan.main.jp/tegami.html

ウゲン・ワンディ監督

(10)2022 年度第 10 回ブータン連続セミナー

【概要】

日 時:2022年9月24日(土) 14:00~16:00

題 目:「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ ⑳ =『Yi-Khel Gi Kawa: Price of Letter』(邦

題: 『思いを運ぶ手紙』) (ブータン・2004年) --|

発表者: 津川智明 氏(元 JICA 専門家(地方行政))

平山雄大 (グローバル協力センター講師)

参加者:約55名

【参加者からの感想・コメント (抜粋)】

・ 生きた情報を提供してくださり、大変参考となりました。

- 郵便配達員のテンジンさんの話から、ブータンの国民総幸福についての一端を感じる事ができた。
- ・ 今回の映像作品はいつもにも増して様々なことを考えさせられました。また津川さんのお話も、事 象の説明から入って、非常に深い内容にまで踏み込んでくださり、心に響くものがありました。
- ・ 聴講者コメントで紹介された具体的な郵便事情もおもしろかったです。
- ・ 平山先生もコメントされていましたが、お手紙を受け取った方が文字を読めず、読める人を探して 読んでもらうというのも郵便局員さんのお仕事というの、興味深かったです。
- ・ このドキュメンタリーを見て、文明に浴しての生活をしている私が、リンシの方たちにそのままで いてほしいと望んでしまうのは何か違う気もして、複雑な気持ちにもなるのですが、津川さんがお っしゃっていたように、都会にはない価値観を持ちながら逞しく生きる人たちの生き方に触れる ことで、自分自身の価値観を問い直す機会にはなると思います。
- 自然と共存しつつ、教育の大切さや、飢饉への備えを忘れない現実的な考えを持っているところが 印象的だった。
- ・ 山本愛理さん、進行お疲れさまでした。通信トラブルにも慌てることのない穏やかな話し方に皆さ んの気持ちがほぐれたと思います。
- ・ 平山さん、大変な状況下での開催、ありがとうございました。次を楽しみにしています。
- ・ 本日、思わぬアクシデントに見舞われたにも拘わらず、予定通りセミナーを開催してくださった平 山先生に深く感謝申し上げます。山本さんはとても大学 2 年生とは思えないくらいしっかりして いらして、いつもながら感心しています。(同窓生としてとても誇らしいです。)





(11) 2022 年度第 11 回ブータン連続セミナー

【概要】

日 時:2022年10月8日(土) 14:00~16:00

題 目:「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ ②

- 『岩合光昭の世界ネコ歩き』「ブータン」(2018 年) -」

発表者:青木薫氏(シデ・ブータン・ツアーズ&トレックスコーディネーター/

ブータン日本語学校校長)

平山雄大 (グローバル協力センター講師)

参加者:約45名

【参加者からの感想・コメント(抜粋)】

・ 幸せの国ブータンというイメージだけが先行しがちですが、今日は、ブータンにはブータンの様々 な生活があるという当たり前のことを認識することができてよかったです。

- ゲストの方のお話にとても興味がもてた。
- ・ 撮影に実際に関わった方でなければわからない現地ならではの裏事情や情報等がとてもよくわかりました。コメンテーターの青木さんのウィットに富んだ説明が楽しくてわかりやすくとても有意義な時間でした。
- ・ 以前から気になっていたブータン猫に関する疑問が解けて良かったです。
- ・ 報道では急速に近代化するブータンですが、青木さんの話から、かわらないブータンの生活を感じ とれました。
- ・ ブータンに永年住んでいて、今も住んでいる人の解説は、何を聞いても答えられてさすがと思いま した。
- ・ 猫と人間が寄り添っている姿が印象的でした。お互いを支えあっているようで、自分と他との関わり方を考えさせられました。
- ・ 幸せの国ブータンというイメージだけが先行しがちですが、今日は、ブータンにはブータンの様々な生活があるという当たり前のことを認識することができてよかったです。
- ゲストの方のお話にとても興味がもてた。
- ・ 撮影に実際に関わった方でなければわからない現地ならではの裏事情や情報等がとてもよくわかりました。コメンテーターの青木さんのウィットに富んだ説明が楽しくてわかりやすくとても有意義な時間でした。
- 以前から気になっていたブータン猫に関する疑問が解けて良かったです。
- ・ 報道では急速に近代化するブータンですが、青木さんの話から、かわらないブータンの生活を感じ とれました。
- ・ ブータンに永年住んでいて、今も住んでいる人の解説は、何を聞いても答えられてさすがと思いま した。
- ・ 猫と人間が寄り添っている姿が印象的でした。お互いを支えあっているようで、自分と他との関わり方を考えさせられました。

- ・ 現場の人のお話は、とても興味深いです。
- ・ 映像を題材にした視点はとてもわかりやすくいいなぁと思います。
- ・ 有料でも十分いけそうな平山先生のブータンシリーズ、毎回頭が下がります。ご無理のない範囲で 末永く続けていただきたいです。山本さんの司会も毎回上手になっていますね。頑張ってくださ い!





(12) 2022 年度第12回ブータン連続セミナー

【概要】

日 時:2022年10月22日(土)1.4:00~16:00

題 目:「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ ②

- 『鶴瓶の家族に乾杯スペシャル ブータン王国』(2012 年) - 」

発表者:平山雄大(グローバル協力センター講師)

参加者:合計約45名

- ・ ブータンの町のリアルな生活を番組を通じて見ることができましたが、ブータンのことをよく知らない初心者なので、もっと平山先生からの情報が聞ければよりよかったかなと思います。
- 学びが多かった。
- ・ 自然なブータン人の姿が見られてよかった。
- ・ 懐かしい風景を見ることが出来た。
- ・ ブータンの日常風景を垣間見ることができ、良かったです。
- ・ ブータンの人は、休みの日は洋服を着て、仕事や大事な日に「ゴ」「キラ」を着ているということ が驚きました。まさか、伝統服が仕事着だとは知りませんでした。
- ・ 日本で当然と思っていることがブータンでは当然では無いということを学びました。例えば名字が無かったり、伝統的な服を着る文化がまだ残っているということが印象に残りました。
- ・ 水川さんが会った女の子が両親と離れて暮らす姿や、それを親戚みんなで支える様子が印象的で した。日本と比べて「家族」の定義が広いのかなと思いました。
- ・ 家族の絆。鶴瓶さんが、「ショーワの日本やな」と言っていたが、両親とも出稼ぎで親戚の子達と 暮らしていた女の子、経済格差が見えた様でした。

- ・ 今回のセミナーで知りたいと思っていた民族性の違いなどについて理解を深めることができました。次回も楽しみにしております。
- ・ 今回の最後の方で、お話のあった観光税の件が興味深かったです。
- いつもありがとうございます。又楽しみにしております。
- ・ いつも貴重な映像と解説ありがとうございます。





(13) 2022 年度第13回ブータン連続セミナー

【概要】

日 時:2022年11月12日(土)1.4:00~16:00

題 目:「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ ②

-- 『トラベリックスⅢ 世界体感旅行』「ブータン (ティンプー)」(2011 年) --」

発表者:野口ウゲンチョデイ氏(福井大学国際地域学部学生)

平山雄大 (グローバル協力センター講師)

参加者:約35名

- 映像もその後のノグチさんのお話もとてもよかったです。
- 29年前にブータンを訪問しましたが、10年前でもかなり変化があり、今さらに変化していることがわかりました。
- ・ コメンテーターの野口さんの回答も、取りまとめ役の平山先生の補足説明も非常に分かりやすく &詳しく、有意義な時間でした。
- ・ 映像は少し前のものでしたが、野口さんが「今の」ブータンについてコメントしてくださったので、 比較できてよかったです。両親がブータン人でないと国籍がもらえない、という他には載っていな いような情報も興味深かったです。
- あらたなブータン情報を得ることができた。
- ・ 実際のブータンを詳しく説明していただけたのが良かったです。
- ・ 福井県との意外な縁を知ることができました。
- 新たな学びがたくさんありました。

- お坊さんの学校について、結構詳しく紹介されていたのが興味深かったです。
- ・ ugyen choedey さんからのお話であった、現在のブータンの様子、電子機器の発達やスマートフォン等の普及を知り、ブータンの町中を見るだけでは日本の昭和を連想させる暮らしだと感じていましたが、日本よりも発達している部分を知り、更にブータンに行ってみたくなりました。
- ・ ハーフの子どもは、基本的にブータン国籍を取得できないというお話に驚きました。
- ・ 参加者からの意見・質問をすべて取り上げ、真摯に回答してくだった点に好感を持ちました。
- ・ 温かい雰囲気の素敵なセミナーでした。野口さんの若者らしい素直なコメントもとてもよかったです。平山さんと野口さんのつながりも興味深かったです。出会いを大切にされていることがよく わかります。





野口氏による解説 (仏画紹介)

(14) 2022 年度第14回ブータン連続セミナー

【概要】

日 時:2022年11月19日(土)1.4:00~16:00

題 目:「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ ②

- 『トラベリックスⅢ 世界体感旅行』「ブータン (パロ)」(2011 年) -」

発表者:原田ひとみ 氏(日本ブータン友好協会会員)

平山雄大 (グローバル協力センター講師)

参加者:合計約45名(参加申込:54名)

- ・ パロについてはたびたび取り上げられていますが、改めて確認できたことが複数ありました。
- パロの今昔が面白かった。
- パロについてしっかり解説ありで聞けたのが良かったです。
- 非常に分かりやすい内容だった。
- ・ 参加者の皆さんからの質問への平山先生の回答が的確で、学びが深かった。
- 映像やご発表がとてもよかったです。
- ・ 平山先生が「ブータン第二の町パロ」、「チベット仏教が国教」といったナレーションの不明点を細かく指摘されていた点、それらに対して詳しく解説してくださった点がありがたかった。
- 原田さんの発表の中の現地の音が印象に残りました。

- ・ 食文化が面白い。
- ・ 踊りの衣装の意味や伝統など、歴史的な情報が得られて理解が深まりました。
- ・ 宗教と政治の関係性、宗教と環境保護の話が興味深かった。
- ・ ブータン王室や政府が、タイの施策から多くを学んでいるのではないか?という平山先生の指摘が大変興味深かった。
- 10 年前の映像と今とどのくらい違うのか、あまり変わっていない様子と思っていましたが、道路ができて、山奥の村に住む人がいなくなって、というようなことを聞きまして、ブータンの暮らしぶりも大きな変化が出てきているのかな、と感じました。
- ・ 来年度も、このような和気藹々とした雰囲気のブータンセミナーを続けてほしいです。





(15) 2022 年度第15回ブータン連続セミナー

【概要】

日 時:2022年12月17日(土)1.4:00~16:00

題 目:「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ ②

- 『ASIA テレビは面白い』(ブータン部分抜粋版)(2002年)-」

発表者:青木薫氏(シデ・ブータン・ツアーズ&トレックスコーディネーター/

ブータン日本語学校校長)

平山雄大 (グローバル協力センター講師)

参加者:合計約45名

- ・ 青木さんのお話が大変楽しく、こちらのリアクションをリアルにお伝え出来ないのが歯がゆかった。
- ・ 当時の様子が当事者の口から語られ臨場感がありました。
- ・ 本日も気づきの深い学びの時間を誠にありがとうございました。
- ブータンの様々な側面に触れることができた。
- これまで見たことのない昔のブータンの様子を見ることが出来た。
- ものすごい貴重映像を見ることができました。

- ・ 最もアクセスの難しそうな当時のブータンで、世界発の衛星放送にトライしたなんて、なんとチャレンジングなプロジェクトだった事でしょう!ただただ驚きです。
- ・ ブータンから海外への生中継がこれほど大変だったと知れた。ご祈祷でうまく行ったという話が 印象的だった。
- ・ フィリピンに行った際にスーパーで従業員たちが歌いながら商品陳列をする光景を拝見し、(良い) カルチャーショックを受けました。その際に思っていたのがここの人たちってなんて自由なんだ ろうということと、悩みがなさそうな印象でした。フィリピンでの体験と同様に、良し悪しはさて おき、今日の映像では飾りのない自由なスタイルブータン人、ありのままの姿が印象深かったです。
- ・ NHK らしい取材で、当時の状況を裏舞台から知りえたことはよかった。
- ・ 有料でも良い講座ですよね。本当に。いつもありがとうございます。

取り上げる映像

NHK (総合・BS)

『ASIA テレビは面白い』(ブータン部分抜粋版)

2002年11月4日 (月) 8:35~24:00



✓ アジア・太平洋放送連合(Asia-Pacific Broadcasting Union: ABU、1964年に設立されたアジア太平洋地域の放送局及び放送 関連団体の連合体)の関連番組

✓ブータンから世界初の生中継

取り上げた映像の紹介



首都ティンプーのテレビ放送局(当時)

(16) 2022 年度第16回ブータン連続セミナー

【概要】

日 時:2023年1月7日(土) 14:00~16:00

題 目:「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ 26

- 『秘境ブータン(1) 王都の仮面祭り』(1983年)-」

発表者:脇田道子 氏(日本ブータン研究所研究員)

平山雄大 (グローバル協力センター講師)

参加者:約50名

- 40 年前のブータンの様子がよく分かった。近年の状況と比べることによって、ブータン社会の変化を推し量ることができた。
- 昔のブータンが見られ、現在との比較ができて興味深かった。
- 1983年の様子を振り返りながら現代の様子と比較することで、変化がわかり普遍的に続けられる テーマだった。鑑賞だけでなく変遷および現在の状況がわかる流れであった。
- ・ 脇田さんの説明(コメント)は説得力があってすごいなあ、と勉強になりました。
- 脇田さんのコメントが適切で有用であった。
- ・ 脇田さんの幅広い分野の解説がとても分かりやすかった。

- ・ 40 年前をご存知の脇田さんのご解説や質問のご回答がとても興味深かったです。特に「40 年でブータン人が忙しくなった」というのも印象的でした。
- ・ コメンテーターの方の、非常によくまとめられたコメントに脱帽です。
- これからも、オンラインを続けていただけると嬉しいです!でも、そろそろたまには皆さまにお目にかかりたいなーとも思います。
- ・ 今回、日本在住のブータン人と一緒に参加させてもらいましたが、今回に限らず「なんで日本の方はこんなにブータンのこと知りたいと思ってくれるのかな、不思議だな、みんな勉強熱心ですごいな」と言っていました。比較的若いブータンの彼・彼女らにとっても、今回の NHK の映像は自分たちが見たことのないブータンの姿の一つであり、でもなんとなく知っている様子で楽しく見ていました。そんな姿を見て私も嬉しくなりました。貴重な機会をいつもありがとうございます。





(17) 2022 年度第17回ブータン連続セミナー

【概要】

日 時:2023年1月14日(土)1.4:00~16:00

題 目:「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ ②

- 『秘境ブータン (2) 幻の王家の谷へ』 (1983 年) - J

発表者:脇田道子 氏(日本ブータン研究所研究員)

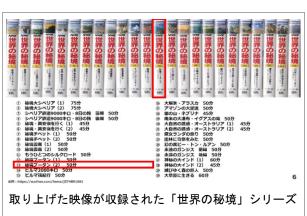
平山雄大 (グローバル協力センター講師)

参加者:約50名

- 昔の映像が見られてよかった。脇田さんの貴重な話が聞けた。
- ・ 1980年代、なかなか人々が訪れることのできなかった時代のブータンを知れた。
- 昔のブータンの映像と当時の背景を補完する解説、非常に勉強になりました。
- ・ 話が興味深く、論拠もしっかりしていました。
- ・ 今のブータンを知る上で、40 年前ブータンと比較しながらのお話を聞くことはとても意義がある と思いました。
- ・ 貴重な映像を視聴することができ、素晴らしい解説をしていただきました。
- ・ 貴重な映像を見ることができ、その後の脇田先生の解説もとても良かったです。

- 脇田さんの解説がとても勉強になりました。
- ・ GNH と声高に叫び始める前の方が、幸せ感が漂っていたというご指摘に同意しつつ、自分自身は 文明に浴した生活をしながらブータンに昔のままかわらないでいて欲しいと願うわけにもいかな い気がしてジレンマを感じます...。それでも、同じ時代を生きるブータンの人々との交流から今で も学べることがあると思います!
- ・ 40 年間でブータンでも交通の便が飛躍的に良くなったという話が印象に残りました。また、近代 化や技術革新は誰もが望む事で、それによって伝統的な生活様式や文化が衰退する事をもったい ないと嘆くのは部外者の身勝手…と分かっていながらも、ブータン固有の文化や良さも変わらな いでいてほしいと思わずにはいられない。美しい映像が印象的でした。
- ・ 前回に続いて脇田さんの解説がとてもよかったです。パワーポイントの資料もわかりやすくて参 考になります。GNHに対するコメントも共感する部分が多かったです。





(18) 2022 年度第18回ブータン連続セミナー

【概要】

日 時:2023年2月4日(土)1.4:00~16:00

題 目:「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ ②

- 『A King is Crowned』(インド政府公式記録映像・1974 年)他―」

発表者:平山雄大(グローバル協力センター講師)

参加者:約45名

- ・ 第4代国王の戴冠式の映像は貴重で、嬉しかったです。
- アクセスが遅れ最後の数十分しか参加できませんでしたが、興味深い内容でした。
- 2 つのフィルムの比較が興味深かった上、当時の南アジアの元首の映像が見られたのは面白かった。
- ずっと見たかった未見のフィルムでした。NHK の番組も見られたのは予想外でした。
- 第4代王の戴冠式の様子がじっくり観れて、当時のブータンの様子を知ることができた。
- ・ 貴重な映像のみならず解説もあり学ぶことが多かった。

- ・ インドとの深い関係をより感じることができました。ネパール人の踊りも多く、印象的ですね。
- ・ この NHK の番組でブータンを知り、王様のファンになったので、感慨深いです。
- ・ 国民に対する言葉を述べる新国王の凛とした姿がとても印象に残っています (弱冠 18 歳という若 さでご立派)。小国なりの外交の苦労の一部も映し出されていたように思います。
- ・ 参加者の質疑応答も勉強になりました。
- ・ 参加したのが最近で大変残念です。もっと早く知っていればよかったです。
- 視聴前のコメントがとても役立ちます。
- ・ こちらの英語力の無さから、後半(インドの放送局のもの)は聞き取るのに必死になってしまい、 思ったほど映像に集中できなかったのが残念でした。せめて英語でも良いので字幕があったら有 り難かったと思います。





(19) 2022 年度第19回ブータン連続セミナー

【概要】

日 時:2023年2月25日(土) 14:00~16:00

題 目:「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ 29

- 『The World About Us』「Letter from Thimphu」(イギリス・1968 年) - 」

発表者:平山雄大(グローバル協力センター講師)

参加者:約60名

- ブータンを多面的に知ることができる。昔のブータンの風景、私も髪型が気になりました。
- BBC の放送は、沢山の情報を詰め込んで豊富でしたが、1 人の少年の視点に立っている工夫がと ても良かったと思いました。時間をかけてこういう形にしたのかなと思いました。
- 55 年前の様子が分かる貴重な映像だった。建物や道路の建設風景、鍛冶屋、お椀作り、織物作り の様子など何がどんな風にしてできているのか、知ることができた。
- ・ ブータンが恋しくなっていたので映像を見て満たされた。
- ・ 55年前の映像が見られて有意義。
- 普段あまり知る機会がない時代のブータンの様子が分かった。
- ブータンの方の声を聴けてよかったです。

- ・ 髪の長さから文化や伝統を考える視点は興味深かったです。
- ガイドのペマさんの参加とお話がとても良かったです。
- ・ 道路建設の場面でネパール人の女性が子供を抱っこしながら石(?)を小さく砕いていたり、建物 建設の場面で女性が足と棒で泥を踏み固めている場面が印象に残った。
- ・ 50 数年前のブータンの様子が分かりとてもよかったです。
- ・ 前半参加できなかったもので平山さんのお話を伺えなかったのが大変残念でした。
- ・ 画面オンにして参加できたらな~と思いつつ、なかなかタイミングが合わず…。大変受動的ですが、 何かきっかけを頂ければありがたいです。
- ・ 来年度も本セミナーはあるのでしょうか。ぜひ続けていただけることを期待しています。
- ・これだけのことを準備されるのは、大変なことと思っております。ありがとうございました。
- ・ 映像視聴前の解説は視聴にとても役立ちます。





(20) 2022 年度第20 回ブータン連続セミナー

【概要】

日 時:2023年3月11日(土)1.4:00~16:00

題 目:「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ 30

—『Prime Minister Visits Bhutan』(インド政府公式記録映像・1960年)—」

発表者:平山雄大(グローバル協力センター講師)

参加者:約45名

- ・ 非常に興味深かった。インドとブータンの関係を初めて知った。
- 事前の解説があって映像の理解がしやすかった。
- ・ 貴重な映像を平山先生の解説で観ることができ、非常に満足です。
- ・ 平山先生の詳細に渡る説明がわかりやすかったです。
- 貴重な映像が見られ、また詳しい解説を聞くことができました。
- いつも新鮮な話題と映像、わかりやすい解説でとても理解が深まる。
- 貴重な資料映像をていねいな解説つきで見ることができた。

- ・ 今回は平山先生が視聴前に時間をかけて映像の解説をしてくださり、その際に自分のメモを見ながら視聴することができましたので、ナレーションがヒンディー語であったにも拘わらず、流れがよく理解できました。また、ネルー首相のブータン訪問の全体を見ることができて大変有意義でした。
- ・ シッキム、チベットとの繋がりを映像で確認できた。
- ・ 映像についての事前及び視聴中の解説が適切で理解が進みました。
- ・ 事前のご説明やちょっとした「こばなし」が予備知識として理解の助けになっている。
- ・ 将来のことを考える時、過去の歴史を知ることが大いに役立つという平山先生のコメントが印象 に残った。
- ・ 4月からもこのセミナーが開催されると知り、本当に嬉しかったです。いつか生講義が開催される ことを願っております。4月からもよろしくお願いいたします。
- ・ ありがとうございました。毎回 1 つのテーマで区切りがあるので、全部参加できなくても大丈夫 なのはありがたかったです。もちろん、以前の話で聞いたあの場面のことだ!と関連付けて思い出 した時は、「あの回を見ていてよかった」と嬉しく思いました。
- ブータン愛に溢れたアットホームなセミナーで楽しかったです。





3. 途上国研究 • 国際協力分野海外調査支援

3.1 実施概要

【目的】

「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成—女性の役割を見据えた知の連携—」事業の一環として、本学大学院博士課程(前期・後期)の学生による途上国研究、国際協力に関する現場に根ざした調査研究を支援するため、公募により選定された海外調査への支援を行う。

本事業は、以下の2つからなる。

- (1) 「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成—女性の役割を見据えた知の連携—」事業の一環として、2011年度から実施している海外調査支援。
- (2) 本学卒業生の故野々山惠美子様の遺贈により、アフガニスタンをはじめとする困難な状況にある開発途上国を対象とした調査、研究、実践のために設立された「アフガニスタン・開発途上 国女子教育支援事業野々山基金」事業の一環として、2013年度より実施している開発途上国に

おける女子教育分野の海外調査支援。

【対象分野】

- (1) 国連・持続可能な開発目標 (SDGs) の 17 ゴールに関連するテーマ (「グローバル社会における 平和構築のための大学間ネットワークの創成—女性の役割を見据えた知の連携—」)
- (2) 開発途上国の女子教育、基礎教育、ノンフォーマル教育に関連するテーマ(「アフガニスタン・開発途上国女子教育支援事業野々山基金」)

【支援内容】

20万円を上限として、航空運賃、ビザ代、予防接種代、海外の調査地での宿泊費、その他グローバル協力センターが必要と認める費用を本学及びグローバル協力センターの規定に基づき支給する。これらの費用の総額が20万円未満の場合は実費を、20万円以上の場合は20万円を支給する。

3.2 今年度の募集と選考結果

今年度の募集と選考結果は以下の通り。他方、採択となった 2 件とも、海外調査の実施が年度内困難となったことから、実施なしとなった(来年度繰り越しは無し)。

【募集時期】

2022年5月17日(火)~6月14日(火) 2022年10月14日(金)~11月11日(金)

【選考結果】

(1) 国連・持続可能な開発目標(SDGs)の17ゴールに関連するテーマ 応募者:3名、採択者:2名

氏名	毛 依文
所属	人間発達科学専攻 D3
テーマ	祖父母養育と青年期の心理的適応との関連
調査国·都市	中国 (北京市)
調査時期	※2022 年 9 月 14 日~9 月 27 日を予定していたが、新型コロナウイルス感染
	症の状況から調査を断念し、未実施のまま終了した。

氏名	王 小鳳
所属	人間発達科学専攻 D1
テーマ	中国の失独者における自助的マインドフルネス療法への参加意図の関連要因に
	ついて
調査国·都市	中国(陝西省宝鶏市)

調査時期 ※2023 年 2 月 15 日~2 月 23 日を予定していたが、倫理審査委員会への倫理 審査申請書の提出が遅れ今年度中の調査実施が現実的ではなくなってしまった ため、支援を辞退(未実施のまま終了)した。

(2) 開発途上国の女子教育、基礎教育、ノンフォーマル教育に関連するテーマ 応募者:0名、採択者:0名

4. 大学間連携イベント

4.1 5女子大学学生発表・パネルディスカッション(アフガニスタン女子教育支援 20 周年記念シンポジウム)

アフガニスタン女子教育支援 20 周年を記念し「紛争地域の女子教育支援を通した国際協力のあり方」をテーマとして開催されたシンポジウム(令和4(2022)11月)において、大学間連携イベントとして、五女子大学コンソーシアムを構成する各大学の学生による国際協力活動の発表とパネルディスカッションを行った。

まず、大学が主催する取組み、サークルや個人での活動、またゼミの活動の一環として国際協力を行ってきた各五女子大学の学生による活動報告を行った。具体的には、本学のグローバル協力センターが主催する「アフガニスタン勉強会」の活動(お茶の水女子大学)、カンボジアの女子保健教育支援を行う学生団体「レアスマイル」の取組み(津田塾大学)、日本に暮らすムスリムの子どもたちへの学習支援(東京女子大学)、フェアトレード活動等を行う学生団体「HUA」の取組み(奈良女子大学)、カンボジアの母親支援を行うゼミ活動(日本女子大学)に関して、活動を通した学びや活動を行う中での悩み・葛藤に関しての報告がなされた。

後半の各五女子大学の学生によるパネルディスカッションでは、モデレーターを務めた平山雄大講師の進行のもと、大学での日々の学びと自身の活動がどのようにリンクしているのか、コロナ禍における国際協力活動の工夫、支援対象との「距離」をどう克服するのかなどの問いに意見を出し合った。他者や異文化を理解するうえでのヒントや、それぞれの活動の展望と今後の目標に関する発言もあり、学生による国際協力活動の可能性が感じられた。

5. 「共に生きる」スタディグループの活動

「共に生きる」スタディグループとは、国際協力や平和構築に関心を持ち「共に生きる」社会について自主的に学習・活動する学生のグループであり、グローバル協力センターはその活動を様々な形で支援している。グループのメンバーは、センターやメンバー有志が企画したイベントや勉強会にそれぞれの関心に応じて参加することができる。これらの学生企画イベントの案内、センター企画のイベントの案内、および、国際機関、NPO等のセミナー・イベント情報等についてはスタディグループのメーリングリスト(登録メンバー数は150名)にて発信している。今年度は15.2件の情報配信を行った。

グローバル協力センターでは、毎年「共に生きる」スタディグループ説明会を実施しており、今年度は5月23日と6月6日の2回、対面形式で開催した。説明会では、新規メンバーの参加を呼びかけるとともに、途上国の教育支援や社会課題の解決を目指した活動をしている学生グループの紹介を行った。

今年度前期には、アフガニスタンの社会や女子教育等に関心のある学生と本学の元留学生が参加する「アフガニスタン勉強会」が実施され 1.1 月の徽音祭で学びの発信を行った。

また、年間を通じて、学生有志による中古教科書の再販を通じた国際協力活動、フィールドワーク合宿への参加やこれらに関する報告会など、スタディグループメンバーの学生による国際協力実践の諸活動と、グローバル協力センターによる支援・推進が行われ、その概要がセンターのウェブサイトで発信された。

5.1 「共に生きる」スタディグループ説明会の実施

■ 日時:2022年5月23日(木)、6月6日(月)12.30~13:00

■ 場所:生活科学部本館 126 室

■ 内容:「共に生きる」スタディグループについて 国際協力活動に取り組む学生団体「STUDY FOR TWO お茶大支部」、「お茶の樹」による活動紹介

■ 参加者:16名





説明会の様子

5.2 アフガニスタン勉強会

グローバル協力センターの呼びかけにより、本学の元アフガニスタン人留学生(2022 年度時点では グローバル協力センターのアカデミック・アシスタント)とアフガニスタンの社会や女子教育等に関 心のある学生が集まり、センター室にてアフガニスタン勉強会(Afghanistan at a Glance)を全 10 回 実施した(毎週金曜昼休み)。各回のテーマには、アフガニスタンの歴史、子ども・女性、民族の差別 や人権問題などが取り上げられ、アフガニスタンの現状や課題に対し理解を深めることができた。また、参加者は 10 月にアフガニスタン料理講習会(アフガニスタン伝統料理「ボラニ(Bolani)」づくり)も開催(詳細は「5.3 学生自主活動の支援(4)を参照」。参加者は、勉強会での学びに対し、学生として何ができるか等について議論し、その内容を 11 月の徽音祭、及び 11 月 4 日に開催されたアフガニスタン女子教育支援 20 周年記念シンポジウムで発表した。

【勉強会スケジュール】

No	Date	Title
1	05/27	General information about Afghanistan
2	06/03	Afghan- Japan relationship
3	06/10	An overview on Afghanistan's history
4	06/17	Afghan women in the last 50 years
5	06/24	Women activists before and after Taliban (Last 3 years)
6	07/01	Afghan children and war
7	07/08	Diversity of ethnicity in Afghanistan
8	07/15	Human crimes in Afghanistan (Hazaras' Mass Killing)
9	07/22	Video displaying
10	07/29	Discussion (the role of young generation in peace building)

参加者:延べ72名

5.3 学生自主活動の支援

(1) STUDY FOR TWO

「STUDY FOR TWO お茶の水女子大学支部 2022 年度活動報告」

STUDY FOR TWO は、全国の 43 の大学に支部 をもつ、ボランティアの学生団体です。「勉強した いと願うすべての子どもたちが勉強できる世界 に」「FOR ME. FOR TWO のボランティアが当た り前の世界に」の2つの理念を掲げて、活動を行 っています。理念達成のため、私たちは日本の大 学生からの使い終えた教科書を回収し、それを安 価に再販売し、その利益の8割以上を途上国の教 育支援に充てる活動をしています。



4月の対面販売の様子

活動としては上記の通り、年に2回の回収と販売

を中心に、週1回のミーティングを行っています。昨年度までは、新型コロナウイルスの影響でオン ラインでの活動に制限されていましたが、今年度からは対面での回収・販売を行いました。不慣れな 露店での活動ではありましたが、様々な工夫をしながら、学生の皆さんなどが温かく受け入れて応援 くださり、無事に今年度を終えることができました。また、4月には地区での活動が、2月には全国 合宿が対面で開催されました。これらの対面活動の復活を踏まえて、改めて人と直接会って話すこ と、言葉以外から得られるものの大きさを強く感じました。

お茶の水女子大学支部は、今年で10年目を迎えた支部です。13年目を迎えた団体全体で見ても、 長寿の支部にあたります。これは誇るべきことでもあると同時に、これまで積み上げてきたものを当 たり前だと思わずに疑問をもち、更に良くしていくべく行動し変革していくことが大切な時期だと考 えます。STUDY FOR TWO の最大の特徴は、一方的な支援ではなく、一般的には支援する側にあた る日本の大学生も、支援される側にあたる途上国の子どもたちも、双方が教育に一歩近づけるような お手伝いをするところです。この唯一無二の特徴を大切にしながら、「STUDY FOR TWO を"創" る」という意識をもち、これからも変化し成長し続けるお茶の水女子大学支部を、そして STUDY FOR TWO を、引き続き見守り応援していただけましたら幸いです。

(STUDY FOR TWO お茶大支部 2022 年代表 小川 祐奈)



1月の対面回収の様子



支部メンバー (一部)

- (2) スタディグループメンバーによる活動・活動報告会
- 1) 「お茶大生島暮らし体験記」

【概要】

日時: 2022年6月13日(月)12.20~13.10

場所:本館 126 室と Zoom によるオンライン開催

参加者:24人

【発表学生による報告】

2022年6月13日、グローバル協力センター「共に生き る」スタディグループの活動の一環として海士ブータンプ ロジェクトが主催する「お茶大生島暮らし体験記」が開催 されました。対面とオンライン合わせて35人ほどの皆さん にご参加いただき、昨年度本学を休学して島根県の隠岐諸 島(海士町)で生活していた、文教育学部人間社会科学科教育 科学コース 4 年の水越日向子より、島暮らしの経験をお話 しさせていただきました。

島根県から北におよそ 60km、日本海に浮かぶ隠岐諸島に は、大小180以上もの島があります。人が住んでいるの



は、隠岐の島町、西ノ島町、海士町、知夫村のあわせて4島で、私はその内の一つである海士町で暮 らしていました。海士町がある中ノ島は、人口2200人程度の小さな島です。島根本土からはフェリ ーで3時間半かかり、映画館はもちろん、スーパーやコンビニは一軒もありません。「不便そう」と 思われる方も多いかもしれませんね。

海士町には「ないものはない」というキャッチコピーがあります。これは「生きるために必要なも のはすべてここにある」という意味が込められているそうです。海士町は「ないものはない、でも知 恵と工夫で暮らしは楽しめる」という活気に満ちた島でした。

私は、教育をきっかけに隠岐島前地域の活性化を目指す「隠岐島前教育魅力化プロジェクト」のインターンとして、海士町の「隠岐國学習センター」という公立塾で働いていました。塾といっても学習センターは少し変わっていて、勉強だけではなく「生きる」とはどういうことかをみんなで悩んで探しているような、高校生も大人も関係なく人間同士で向き合える場所でした。私はそこでいろんな人と出会い、とにかく濃い時間を過ごしました。

公私の区別のない島暮らしでは、裏も表もなく、そのままの自分で生きるしかありません。だから海士町では、あらゆる場面で、ごまかしの効かない人間くさい関わり合いが生まれていたのだと思います。私自身、たくさんの方々と関わり、支えられ、何か温かい大きなものに包まれたような1年でした。私にとって、ありのままの自分で生きて、その自分を面白がってもらえたことは、何にもかえが



たい経験で、この1年がこれからの自分を生かしていくのだろうという実感があります。

私が休学して海士町に行った理由は、ただこれから生きていくことが怖かったからです。綺麗な理由はいくらでも書けますが、根底には、就活への恐怖と、上澄みを掬ったような自分のあり方への違和感がありました。海士町には、積極的に辿り着いたというよりは「流れ着いた」という表現の方がしっくりきます。

流れ着いたその場所で、私と同じようにもがきながら生きている人間と出会い、頭でこねくり回していたら見えなくなってしまうものがあると気づきました。何かを大切にすることに理由を見つける必要はないのだと思います。星は綺麗だし、自然はすごいし、好きなものは好きです。それに綺麗な理由をつけようとしたら、本当に大切なものから離れていってしまう気がします。私は、大切なものを大切にして、その場その場で出てくる自分を面白がりながら、生まれたからには楽しく生きていきたいです。

島から帰り、復学してから2ヶ月ほどが経ちますが、はっきり言って楽しいことよりも苦しいことの方が多いです。しかし、当たり前のように悩み、葛藤する日々のなかで、海士町で出会った皆さんや、大切な友人、そして新しい出会いに支えられて、なんとか自分を面白がれていると思います。とてもありがたく、海士町での経験を通じて現状を面白がる力が身についたように感じています。

今回、このような私の経験をお話しする機会 をいただいたことで、自分自身を見つめ直すき



会場の様子

っかけになりました。理路整然と話すのが得意ではなく、拙いお話しにはなってしまいましたが、ぽつりぽつりと出てくる言葉のなかに、私自身気づきが多くありました。

ご参加いただいた皆さん、質問をお寄せいただいた皆さん、ありがとうございました。こんなにも 多くの皆さんに関心を寄せていただけたことが本当に嬉しかったです。今後も何かしらの形でつなが り続けられたら嬉しく思います。

(文教育学部人間社会科学科4年 水越 日向子)

2) JICA 中国主催・因島フィールドワーク合宿への参加

【概要】

参加期間:2022年8月7日~8月15日

参加者:中国地方 5 県在住の大学生・大学院生 12 名(本学学生は広島出身のため参加)

合宿地:広島県尾道市因島

【発表学生による報告】

8月7日から15日までJICA中国主催の「因島フィールドワーク合宿」に参加しました。イベントには、私を含め12人の学生が参加しました。イベントの参加対象者は中国5県在住の大学生・大学院生ということでしたが、実家が広島にあるということで、この企画に参加することができました。

因島は瀬戸内海にあり、造船業で栄えた島です。特に、日の出や日の入りは美しく、心がなごやかになります。現在は、外国人技能実習生が産業を支える一方で、高齢化、コミュニティの崩壊、後継者不足や耕作地の放棄などの問題も抱えています。因島では、アメリカ人建築家ヴォーリスの建築物がペンションとして使用されていて、自由時間にそれを見学することもできました。

この合宿の目標は、「参加者それぞれが合宿参加後に自分たちが住む地域で主体的に多文化共生社会の実現や地域の課題解決に貢献できるひとりとなること」です。プログラムには、地域開発に関する講義や地元企業や外国人実習生へのインタビューなどが含まれており、集大成としてイベントを企画し、開催することとなっていました。

この合宿を通して、特に印象に残ったことが2つあります。一つ目は、普段関わることのない地域の大学に通う学生と交流できたという点です。個性豊かな素敵な学生ばかりで、興味のあることを共有しあったり、一つの課題に対して全く違う観点から話したりすることができて、とても刺激的でした。初日に、「近所の農家さんからいただいた。」と大量の野菜を持ってきた学生がいて、とても驚きました。東京の私の住居の周りには畑はありませんし、近隣の人と関係も希薄だからです。都市部の学生とは違い、「地域に寄り添いつつ、世界にもつながる」というスタンスでいる学生が多いのかな

と感じました。また、私は東京では、「訛って いるね。」と言われ、気になることがあるので すが、イントネーションを気にせずに(むし ろ、懐かしい気もしながら) 話せたの嬉しか ったです。

二つ目は、地方活性化のためにできること は観光だけではないということです。私は、 地域活性化への取組みと言えば観光による集 客というイメージを持っていました。しか し、今回伺った因島の企業は既存の造船技術 を生かした産業を創出されておられ、小規模



日の出です。空気も景色もきれいでした。

ながらも地元に人やお金を呼んでいることを知りました。中小企業の強みを生かし、やりたいことを 提案できる関係が素晴らしいと感じました。観光は、一時的なものになりがちだと思います。地域社 会を継続させていくためには、流行や観光に頼るのではなく、地域の歴史や産業を生かした振興策を 考えていく必要があることに気づかされました。

なお、合宿の活動内容については、参加学生が毎日日記をつけるような形で紹介しています。詳細 は(https://note.com/team34/n/n8403ec9e5106?magazine_key=mb8ea27e0f214)からご覧いただけ ます。

最後に、今回が大学生になって初 めて、宿泊を兼ねたイベントへの参 加でした。対面で会って多くの時間 を共に過ごしたからこそ、話せたこ ともたくさんあると思います。実際 に、その場に行くこと、人と出会う ことの大切さを改めて感じました。 今回得たつながりや学びを今後も生 かしていきたいです。



因島の浜辺にて。地元の人で賑わうビーチでした。

(生活科学部人間・環境科学科3年 畑岡美代)

(3) GO VOTE OCHA! (Gotcha!)

スタディグループメンバー有志が、2022年7月10日投開票の参議院議員選挙に向け、本学学生の 投票率向上をめざして投票促進運動を行った。学生は選挙情報の発信と投票方法に関する相談受付を

実施した。具体的には、「GO VOTE OCHA!(Gotcha!)」インスタグラム上での各メディアの選挙特設ウェブサイト・候補者・政党選びに関する情報収集に役立つウェブサイトの紹介、各政党の主張および不在者投票制度をはじめとする投票方法に関する情報を発信した。また、本学構内でのポスターの掲示や授業での投票の呼びかけにより、選挙日程を周知した。投票方法に関する相談受付では、

「GO VOTE OCHA! (Gotcha!)」のライン公式アカウントを用いて、投票方法に関する相談等を受け付けた。グローバル協力センターは、これら活動をセンターホームページで紹介するなどの支援を行った。

HP 掲載内容

GO VOTE OCHA! (Gotcha!) 参院選2022 のお知らせ

「共に生きる」スタディグループの活動として、GO VOTE OCHA!有志メンバーが、2022年7月10日の参議院議員選挙に向けて、投票促進活動を行います。

日本における議会選挙の投票率は低下しており、特に10代、20代の若者の投票率は50%を下回っています。若者の投票率の低下は「若者の政治離れ」として社会的な注目があつまっています。

GO VOTE OCHA!は、2022年7月の参議院議員選挙に関する情報発信を通じて、 特定の候補者や政党を支持するのではなく、あくまで投票率を上げることで、若 者の声を政治的意思決定の場に反映することを目的に発足しました。選挙日程の 2022年6月22日更新



ポスターPDFはこちら

周知やインスタグラム上で各メディアの選挙特設ウェブサイトや、候補者・政党選びに関する情報収集に役立つ ウェブサイトの紹介を行うなど、選挙情報の発信を行っています。また、ライン公式アカウントを用いて、投票 方法に関する相談等も受け付けています。

実施日時	~2022年7月8日(金曜日)まで
場所	大学構内、SNS(インスタグラム、ライン)上
対象	本学学生
夢加方法	候補者・政党選びの参考になる情報や不在者投票などの投票方法についての相談がある方は、 <u>ポスター</u> に記載のQRコードにアクセスしてください。
主催	グローバル協力センター「共に生きる」スタディグループ
	GO VOTE OCHA! (Gotcha!) 有志一同

(4) アフガニスタン料理講習会:「アフガニスタン伝統料理「ボラニ (Bolani)」作り(アフガニスタン勉強会活動)」

グローバル協力センターでは、2022 年 5 月より、毎週金曜日の昼休みにアフガニスタンに関する勉強会を毎回 7、8 名程度の参加を得て実施した。参加学生は、この学びで得た気づきについて、2022 年 11 月に開催された徽音祭の学術企画として対面と動画で発信したが、発表資料を準備する中で、参加学生から「座学だけではなく実際にその国の料理を作ってみることで、アフガニスタンを身近に感じ、理解を深めたい」との要望があがった。そこで、10 月 13 日(木)、国際交流留学生プラザキッチンにて、勉強会講師である元アフガニスタン人留学生により、アフガニスタンの伝統的な家庭料理「ボラニ(Bolani)」(以下ボラニ)を教えてもらうこととなった。 当日は、集団で飲食をしないことや十分な換気、消毒を行うなど感染症対策に注意し調理を行った。

アフガニスタンは南アジアと中央アジアの間に位置する多民族国家で、その料理は隣接する国々の 影響を受けている。アフガニスタンでは、小麦粉を練ったものを窯で焼き上げた「ナン」が主食とし て広く食べられているが、ボラニは、このナンの生地に具材を包んで焼いた料理であり、アフガニス タンではポピュラーな料理の一つである。ボラニは、お祝いなどで家族が大勢集まるパーティーの時 によく食べられており、元留学生も「子どものころからよく手伝って作っていた」と話していた。ま た、大人数向けに作ることから、複数人で調理することが多いこと、料理をするのは女性のみである ことなども調理の際、説明があった。

ボラニ作りは生地作りから始めた。小麦粉に塩とイーストを入れ、生地をぬるま湯でこねた後、2 時間以上寝かせて作るものだが、当日は時間が限られていることから、予め元留学生に用意をしてもらった。

ボラニの具材(あん)に使う野菜は好みでよいそうであり、今回は、茹でたジャガイモ、チャイブ (風味がネギに似ているハーブの一種)、キャラウェイパウダーとコリアンダーパウダー (いずれも スパイス)を用意した。ジャガイモをマッシュし、みじん切りしたチャイブを和え、2 つのパウダー で味を整えてあんを作り、それを薄くのばした生地に餃子のように包む。生地を丸く薄くのばすこと や、あんを生地にのせてゆく作業は意外に手間と時間がかかり、「アフガニスタンの女性たちは、この料理を用意するときは大勢で取り掛かる」との説明に一同納得した。あんを包み終わった生地は、大量の油を使いフライパンで焼く。アフガニスタンでもフライパンで調理する、との紹介があった。一枚一枚焼き上げるため、非常に時間がかかり、大変な作業であることが実感できた。

当日は、ボラニに付け合わせるトマトソースのチャツネ(Chatni)も紹介してもらった。チャツネはトマト、ニンニク、唐辛子、酢、塩を使いミキサーで攪拌して作る。ニンニクのパンチが少し効いたトマトと酢の酸味がさわやかなソースである。参加学生たちは、ボラニを持ち帰り、このチャツネを添え、ボラニを味わった。

短い時間であったが、参加学生からは、アフガニスタンの食文化の一端を知り、またアフガニスタンの女性の日々の様子を身近に感じることができた貴重な機会であった、との意見が聞かれた。学生たちは、多くの人にアフガニスタンを身近に感じてもらうことを期待し、徽音祭の動画発表資料の中で、調理の様子の一部を紹介した。



一枚一枚ボラニを焼く



トマトソースのチャツネ

5.4 徽音祭 (大学祭) における展示・発表

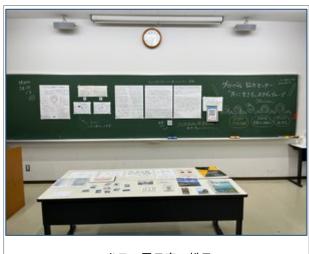
(1) 徽音祭「お茶大生島暮らし体験記」実施報告

2022年11月12日1.3日に開催された第73回徴音祭において、グローバル協力センター「共に生

きる」スタディグループの活動の一環として「海 士ブータンプロジェクト」が主催する「お茶大生 島暮らし体験記」を発表しました。

展示・対面での発表に加えて YouTube で動画を公開し、昨年度本学を休学して島根県の隠岐諸島 (海士町)で生活していた、文教育学部人間社会科学科教育科学コース 4 年生の水越日向子より、島暮らしの経験をお話しさせていただきました。

今回発表させていただいたのは、「自分の考えていることを伝えてみたらどうなるんだろう?」と



当日の展示室の様子

いう率直な疑問がきっかけです。海士町に行って、環境や社会は選ぶこともできるし正解はないと知り、息がしやすくなりました。一方で、どう選択したらよいか分からなくなり、さらに生き惑ったというのが本音です。社会に対する何とも言えない違和感を抱きつつ、それを自分の中に閉じ込めてしまう自分に葛藤しました。

島暮らしでの一番の実りは、自分のまま生きていける場所があるかもしれないと思えたことでし

た。それは、たくさんの方々と関わるなかで、自分の違和感を押し殺さなくても、受け取ってもらえることがあると知れたからです。言わなければ伝わらないけど、伝えてみたら何か起きるかも知れない。ではまずは誰かに自分の考えを手渡してみたらどうかと思い、徴音祭という機会をいただいて発表に臨むことにしました。

私は当日、展示室のすみっこに座っていたのですが、本当にたくさんの方が展示に足を運んでくださり驚きました。あまりにも字数が多くなってしまった手書きのポスターを、端から端まで丁寧に読んでくださる方も多く、とても嬉しかったです。また、大学生の時の迷いを打ち明けてくださった保護者の方、同じように悩んでいる大学生など、実際に声をかけてくださる方も多く、とても励みになりました。ありがたい気持ちでいっぱいです。「何かがすごく楽になった」「少し生きやすくなった」というお言葉をいただき、勇気を出してよかったと強く思いました。

もちろん、若輩者の考えに対して厳しいご意見もありました。私の言葉によって、思わぬ誰かを傷つけてしまったかもしれません。紛れもなく私自身の言葉を、不特定多数の方の前に提示することの重さを実感し、言葉を発することに恐れを抱いています。

しかし、私たちは言葉によって人と繋がることができます。その可能性を掴んだ2日間でした。私が発信することで、誰かの生き辛さを少しでも包み込めるのならば、その責任を自覚した上で、これからも丁寧に言葉を紡いでいきたいと思っています。

きっと大切なことは、簡単に白黒つけられない、やわらかな曖昧さの中にあるのだと思います。ど うしても正しさを追いかけてしまうけれど、私は優しさを大切にしたい。今回の発表を通じて、その 一歩を踏み出せたように感じています。ご参加いただいた皆さま、本当にありがとうございました。 この経験を励みにこれからも生きていきたいと思います。

(文教育学部人間社会科学科教育科学コース 4年 水越日向子)

(2) アフガニスタン勉強会参加報告

私たちは、グローバル協力センターが主催するアフガニスタン勉強会に、2022年の5月初旬から継続的に参加してきました。メンバーは7人ほどで、所属は多様でしたが、みなアフガニスタンの現状に強く関心のある学生でした。勉強会では、アフガニスタン出身の留学生及び職員の方が、自国の歴史や民族、伝統、文化、そしてタリバンによる迫害について、豊富な写真と共にお話しをしてくださいました。

以下、参加したメンバーからの感想です。

「涙ながらに、なかなか知ることのできないことをたくさん話してくれた。その思いも全て含めて、私たちができる何かに繋げたい。」「インターネットなどの媒体を通した情報とは違う、受け取り方をした。」「現地の方の話を聞く方が、ただニュースを見るよりも伝わるものがある。」「タリバン以前のアフガニスタンにおける女性史を知り、視野が広がった。」



「Bolani」の調理の様子

「ハザラ民族に対する差別を知らなかったため、普通に生活しているように見えるが、差別で苦しんでいる人がいるという現状があることを知った。」

まず、生きた証言として当事者である彼女たちの言葉からたくさんのことを知れたことは、日本の一学生である私たちにとって、非常に貴重な機会であったと思います。また、毎回勉強会後には質疑応答やディスカッションの時間もあり、ただの享受ではないという点が、より一層の理解につながりました。

徽音祭でのプレゼン発表活動では、今まで学んできた濃密な内容をいかに咀嚼し、初めての方でも抵抗なく聞くことのできるようにするかを重要視しました。アフガニスタンの伝統料理である「Bolani」を私たちが実際に調理している様子や、「私たちに何ができるか。無関心へのアプローチ」というテーマで討論をしている様子を、動画で流すことで、より身近に感じてもらえるように工夫をしました。

今回の勉強会を通じて、私は学び続けることの意味を知りました。私たち一人ひとりは微力ですが、止まってしまっては意味がない、何も始まりません。私たちが一人で考え、行動し続けることは難しいですが、今回できた仲間と共にこれからもアフガニスタンについての学びを続けていきたいと思います。

(文教育学部人間社会科学科1年 山田真生、吉村紫織)

6. その他

6.1 五女子大学コンソーシアム協定書調印

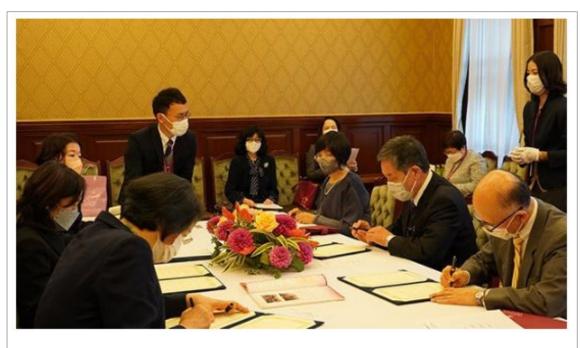
お茶の水女子大学は、平成 14 (2002) 年に津田塾大学、東京女子大学、奈良女子大学、日本女子大学とともに五女子大学コンソーシアムを形成し、共にアフガニスタンの女子教育の普及・発展に取り組んでいる。

平成 14 (2002) 年に調印された「五女子大学コンソーシアム協定」は、平成 18 (2006) 年に支援対象を「開発途上国の女子教育」に広げる改正・3度の更新を経て、令和 4 (2022) 年 10 月末に期限を迎えた。

同年 11 月 4 日、6 回目の協定調印式が、お茶の水女子大学(佐々木泰子学長)、津田塾大学(髙橋裕子学長)、東京女子大学(森本あんり学長)、奈良女子大学(今岡春樹学長)、日本女子大学(篠原聡子学長)の五女子大学学長出席のもと行われた。調印式は本学の大学会議室を会場とし、佐々木学長の挨拶に続き、協定書の概要説明、各大学長による署名が行われた。

同日には、アフガニスタン女子教育支援 20 周年記念シンポジウム「紛争地域の女子教育支援を通した国際協力活動のあり方」が開催され、来賓や講演者からは、五女子大学による女子教育支援の必要性及びそれを継続することの重要性、並びに今後の活動への期待が述べられた(シンポジウム概要は、

6.2 アフガニスタン女子教育支援 20 周年記念シンポジウム開催を参照)。



調印式の様子(本学大学会議室)



署名後の協定を手にした五女子大学学長

(右から、お茶の水女子大学、津田塾大学、東京女子大学、奈良女子大学、日本女子大学)

6.2 アフガニスタン女子教育支援 20 周年記念シンポジウム開催

2022年11月4日(金)、アフガニスタン女子教育支援20周年記念公開シンポジウム「紛争地域の女子教育支援を通した国際協力活動のあり方」(主催:お茶の水女子大学、後援:文部科学省)が、オンラインと会場(本学講堂「徽音堂」)のハイブリッドで開催された。

お茶の水女子大学は、2002年に津田塾大学、東京女子大学、奈良女子大学、日本女子大学とともに五女子大学コンソーシアムを形成し、共にアフガニスタンの女子教育の普及・発展に取り組んできた。2022年はコンソーシアム結成20年目にあたることから、これを記念し、本シンポジウムを開催する運びとなった。シンポジウムは150名を超える参加者・視聴者を得て盛大に執り行われた。

冒頭、佐々木泰子学長による開会挨拶の後、来賓の井本佐智子理事(独立行政法人国際協力機構(JICA))、篠原聡子学長(日本女子大学)、今岡春樹学長(奈良女子大学)、森本あんり学長(東京女子大学)、髙橋裕子学長(津田塾大学)よりご挨拶があった。井本理事は、五女子大学によるアフガニスタン女子教育支援の取組みへの評価と感謝を述べられ、JICAが推進するパキスタンにおけるノンフォーマル教育支援「オルタナティブ教育推進プロジェクト(AQAL)」に関してご紹介いただいた。また、五女子大学コンソーシアムとして共に支援活動を行ってきた各大学の学長からは、当時のご苦労をはじめとしたエピソード、さらには各大学のこれまでの取組みに関する説明がなされた。

続いて、石井クンツ昌子理事・副学長より「アフガニスタン女子教育支援の 20 年間」と題する報告が行われた。報告では、五女子大学コンソーシアム協定締結の背景と経緯、同コンソーシアムの取組み及びお茶の水女子大学としての取組みに関しての紹介がなされた。取組みの成果として(1)日本の女子教育の蓄積に基づいたアフガニスタン支援への貢献が実現したこと、(2)アフガニスタン女性教員の学び(指導法、学校運営、女性のリーダーシップ等)が促進されたこと、(3)アフガニスタン女性教育支援を契機として、五女子大学で国際協力に関する多様な取組みが展開したこと(SDGsや開発途上国に関する勉強会、スタディツアー等)が、また課題として(1)アフガニスタンの女子教育に関する情報収集の困難さ、(2)地方への裨益の困難さや限界、(3)治安悪化・政変による活動の制約があることが示された。また、石井理事・副学長からは、現地で直接的な支援を行うことが難しい状況の中であっても、五女子大学コンソーシアムとして、アフガニスタン女子教育の重要性や支援継続の必要性をメッセージとして伝え続けることが表明された。

上智大学総合人間科学部教育学科教授の杉村美紀先生による「人間の安全保障と国際教育協力—「ここにある未来」を共に歩む—」と題する基調講演では、杉村先生ご自身の専門である比較教育学、国際教育学の観点から、紛争地域の教育が抱える重層的な課題、教育におけるジェンダー平等をめぐる問題、教育の国際連携とネットワーク等に関して詳しく説明があり、紛争地域をはじめとした各国・地域で「人間の安全保障」を守るために教育がどのような役割を担うのかを考える時間となった。また、杉村先生の指導教授である箕浦康子先生(本学名誉教授)が五女子大学コンソーシアムの設立・運営に尽力された、という縁もあり、事前に箕浦先生に伺った、という話も交えながら、五女子大学コンソーシアムの今後への期待が語られた。

続く「アフガニスタンにおける統治の困難さ」と題する講演では、公益財団法人中東調査会研究員の青木健太氏より、アフガニスタンの通史、国の概要、権力移行の流れを中心としたアフガニスタン現代政治史の展開、教育・社会状況とターリバーン統治等について解説がなされた。青木講師は講演タイトルにもある「統治の困難さ」に関して、アマーヌッラー国王(在位 1919~1929 年)の治世における急速な近代化の失敗事例を引き合いに出され、改革は徐々にしかなされないこと、外部からの押し付けは機能せず、和洋折衷の精神でギリギリの妥協点を模索する必要があることを強調された。

シンポジウム最後のプログラムとなる学生報告セッションでは、まず、大学が主催する取組み、サークルや個人での活動、またゼミの活動の一環として国際協力を行ってきた各五女子大学の学生による活動報告が行われた。具体的には、グローバル協力センターが主催する「アフガニスタン勉強会」の活動(お茶の水女子大学)、カンボジアの女子保健教育支援を行う学生団体「レアスマイル」の取組み(津田塾大学)、日本に暮らすムスリムの子どもたちへの学習支援(東京女子大学)、フェアトレード活動等を行う学生団体「HUA」の取組み(奈良女子大学)、カンボジアの母親支援を行うゼミ活動(日本女子大学)に関して、活動を通した学びや活動を行う中での悩み・葛藤に関しての報告がなされた。

後半の各五女子大学の学生によるパネルディスカッションは、モデレーターを務めた平山雄大グロ ーバル協力センター講師の進行のもと、大学での日々の学びと自身の活動がどのようにリンクしてい るのか、コロナ禍における国際協力活動の工夫、支援対象との「距離」をどう克服するのかなどの問 いに意見を出し合う場となった。他者や異文化を理解するうえでのヒントや、それぞれの活動の展望 と今後の目標に関する発言もあり、学生による国際協力活動の可能性を感じられる時間となった。

閉会挨拶では、グローバル協力センターの由良敬センター長が、本シンポジウムが五女子大学コン ソーシアムによるこれまでのアフガニスタン女子教育支援の集大成となったと同時に「明るい未来」 に向けた次のステップの契機となったと総括し、シンポジウムは盛況のうちに終了した。



シンポジウムの様子



報告:石井クンツ昌子理事・副学長



講演: 青木健太研究員 (公益財団法人中東調査会)







IV. 開発途上国の女子教育・幼児教育に関する支援事業(教育・研究成果の国際社会への還元)

1. 乳幼児ケアと就学前教育研修

1.1 概要

お茶の水女子大学では、JICA の委託を受け「中西部アフリカ幼児教育研修」を 2006 年度から 2017 年度にかけて 12 年間実施してきた。2018 年度からは、それまでの成果を継続する形で、対象地域を拡大し「乳幼児ケアと就学前教育(アフリカ・中東)」を実施している(2018~2020 年度の 3 年間実施し、さらに 3 年間の継続更新を行った)。今回の研修は、2021~2023 年度の 3 年計画の 2 年目に相当する。

1.2 背景と目的

開発途上国においては、財源不足や政府関係者の乳幼児ケアと就学前教育(Early Childhood Care and Education: ECCE)に関する意識の低さ等から、ECCE 分野を専門とする人材が不足している状況がある。こうした状況を踏まえ、本研修では、特に ECCE へのアクセスや質の改善が急務となっているアフリカ・中東地域を対象にその整備・普及を図るため、同分野の政策レベルでの人材育成と能力向上を目的とする。

1.3 対象国·人数

5 ヵ国 1.1 名 (イラク 1 名、エジプト 4 名 (うち 2 名はオブザーバー参加)、マラウィ 1 名、マダガスカル 4 名 (うち 2 名はオブザーバー参加)、シエラレオネ 1 名)

1.4 研修員

中央の教育省や子ども省等、政策レベルで幼児教育や就学前教育を監督する省庁の担当課長レベル

1.5 研修期間

2022年11月10日(木)~12月9日(金)

1.6 研修形態

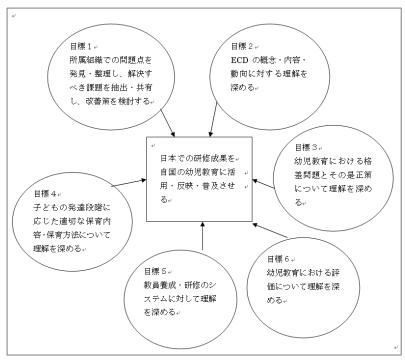
オンライン(Zoom)

1-7 プログラム概要

6つの単元目標に沿って、講義、実習、討議を行った。研修員の理解を確実なものにするため、併せて 2回の振り返り(シェアリング・タイム)も実施した。



乳幼児ケアと就学前教育研修 6つの単元目標



1-8 日程表

日付	B- 3	·91	形態	研修內答	維 師又 は見学規 抱当客等	
					氏名(散称略)	所属知及び職位
11/10(木)	17:00	17:30		同業式		
	17:30	18:30	鮮袋	日本の幼児教育(1)制度と政策	浜野陸	お茶の水女子大学・教授
11/14(月)	17:00	19:00	発表	インセプションレポート発表	浜野陸	お茶の水女子大学・教授
11/16(水)	17:00	18:30	討議	母子保護	恩蜡散子、获 原明子	國際協力等門員
11/18(金)	17:00	19:00	維物	日本の幼児教育(2)カリキュラムと教育実 践	浜野隆	お茶の水女子大学・教授
11/21(月)	17:00	19:00	業物	論理的思考の学生え	坪川紅美	聖無浜松浦院かけり保育 園・劇園長
11/22 (火)	17:00	18:40	維装	日本の教員機成	小原優資	日本学術機関会・研究員
	18:40	19:00	討議	シェアリング・タイム	浜野隆	お茶の水女子大学・教授
11/25(金)	17:00	19:00	業物	子とも中心の保育	内田伸手	IPU,環太平洋大学,教授
11/28(月)	17:00	19:00	維装	保育内容と保育計画(領域「振蠟」を中心 に)	松勝のりチ	お茶の水女子大学・助教
11/29(火)	17:00	19:00	討議	帰國研修員との意見交換	浜野隆	お茶の水女子大学・教授
11/80(水)	17:00	19:00	維装	BCD の理念と国際動向	三輪千期	広島大学・准教授
12/2(金)	17:00	19:00	業物	幼児教育における評価(QOLを中心に)	松本聡子	お茶の水女子大学・特任ア ソシェートフェロー
12/\$(月)	17:00	19:00	業物	障害児教育	齊藤彩	お茶の水女子大学・助教
12/7 (水)	17:00	18:30	業物	日本の幼児教育(3)BCCBにおける施設・設備の基準	浜野陸	お茶の水女子大学・教授
	18:30	19:00	討議	シェアリング・タイム	浜野陸	お茶の水女子大学・教授
12/9(金)	17:00	18:30	討議	研修員発表·総括	海野陸	お茶の水女子大学・教授
	18:30	19:00		開業式	-	

2. アフガニスタン国未来への架け橋・中核人材プロジェクト等

JICA は、アフガニスタンの持続的な開発を支える中核人材の育成を目標として、2011 年から 2025 年まで、同国の行政官及び大学教員を日本国内の大学院修士課程等へ受け入れる「未来への架け橋・中核人材育成プロジェクト (PEACE)」を実施している。

本学では、これまで2名の研修員を受け入れた(2014年4月~2017年3月、2017年10月~2020年3月)。2021年10月より、新型コロナウイルス感染症拡大の影響から受入が延期となっていた研修員2名を新たに受け入れた。2名の研修員は、大学院人間文化創成科学研究科ライフサイエンス専攻博士前期課程において、JICA支援の特別プログラム(※)によるチューターと補助教材を活用し学びを進めており、2023年9月の大学院博士前期課程修了を目指す。グローバル協力センターでは、PEACE以外のプログラムで受け入れているアフガニスタンからの学生(大学院生)への様々な支援(日本語能力向上や福利厚生に関する情報提供他)も行っている。

※既存の大学の授業や研究室での指導に加え、特定の目的達成や開発ニーズを踏まえた特別の活動を 行うことにより、更なる効果の向上を目指し実施される付加的プログラム。グローバル協力センター では、本プログラム実施のための JICA との業務委託契約に係る事務処理を行い支援した。

3. アフガニスタンへの絵本寄贈

3.1 概要

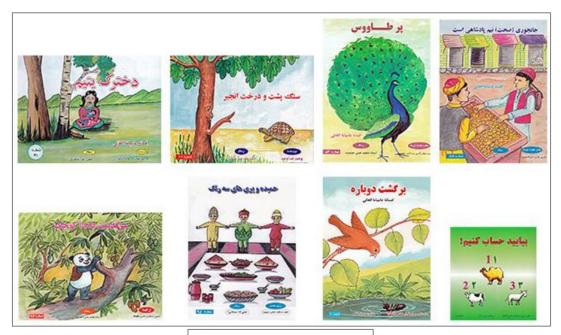
アフガニスタンをはじめとする開発途上国における女子教育に関する事業への支援を行うことを目的として平成 23 (2011) 年度に設置された「アフガニスタン・開発途上国女子教育支援事業野々山基金」の活動として、同国で絵本・図書館事業を展開する公益社団法人シャンティ国際ボランティア会と協力し、2012 年度から絵本の作成・印刷・配布を実施している。これまで 8 タイトル、ダリ語とパシュトゥ語で各 1.200 冊 (合計 1 万 6,800 冊)を印刷し、カブール州とナンガハル州の子ども図書館・公共図書館・学校図書館を中心に配布している。今年度は前年度に引き続き、9 タイトル目の絵本制作に取り組んだ。

これまでに作成した絵本(ダリ語、パシュトゥ語各 1.200 冊印刷・配布)

出版年	タイトル
2013	『孤児の女の子
2014	『亀とイチジクの木』
2015	『クジャクの羽』
2016	『幸せの半分は健康から』
2017	『パンダの冒険』
2018	『ハミダと栄養三兄妹』
2019	『恩返し/Pay Back』
2020	『数をかぞえよう』

これまでに作成した絵本の配布先

配布対象小学校・図書館	校・館数
小学校図書館	175 校
(カブール州、ナンガハル州、ラグマン州)	
公共図書館	12 館
(カブール市国立図書館、ナンガハル州 5 館、マザリシャリフ州 1 館、クナール州	
2館、ヘラート州1館、ラグマン州2館)	
シャンティ国際ボランティア会運営図書館	1 館
(ナンガハル州ジャララバード市子ども図書館)	



これまでに出版された絵本

3.2 背景と目的

内戦を経て復興に取り組むアフガニスタンにおいては、女子の就学を含めて教育の復興が国家再建の重要な課題である。しかし識字率や就学率は依然として低い状況にあり、学校や教材の整備も十分に整備されていない。このような状況下で、アフガニスタンの児童のための図書の作成・寄付を実施することとし、同国において子どものための図書館事業を実施しているシャンティ国際ボランティア会に子ども向け絵本の作成・配布を委託する。本事業は2021年のアフガニスタン政変後も継続して実施している。

3-3 対象地域·事業受益者

- アフガニスタン・イスラム共和国(カブール州、ナンガハル州、ラグマン州等)
- 絵本・紙芝居配布:小学校 175 校、公共図書館 12 館、子ども図書館 1 館
- 研修:省庁職員、公共図書館員、教員養成校教員計10名
- 移動図書館活動:延べ3.134名の子ども
- 子ども図書館運営:延べ2万2.178名(2020年1月~12月)の子ども

3-4 2022 年度絵本の作成状況

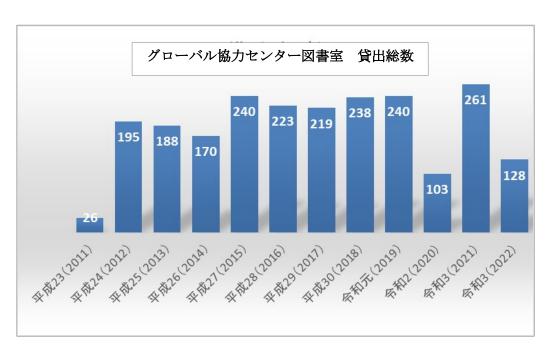
9タイトル目の絵本は、アフガニスタンにおいて障がい者への差別が根強い背景から、「インクルーシブ教育」をテーマとし、アフガニスタンで障がい者支援を行う団体より紹介のあった方にインタビューを行った内容を元にしている。2021年8月のアフガニスタン政変の影響により、公益社団法人シャンティ国際ボランティア会は活動の一時中止を余儀なくされ、活動再開後も、物語や絵の承認など、各プロセスでの管轄省庁との調整に予想以上に時間を要している。今年度中には出版には至らなかったが、次年度も引き続き作業を進め、出版・配布を目指す。

V.その他

1. グローバル協力センター図書貸出状況

グローバル協力センター図書室は平成23年(2011)年から開室しており、国際協力、平和構築、開発に関する教育・研究、学習に必要な図書およびその他の資料を収集・管理し、お茶の水女子大学学部生、大学院生、附属高校性、卒業生および教職員の利用に供するように務めている。2022年度は56冊図書を受入れ、2023年2月末時点で、2.158冊蔵書している。開室時間は祝祭日、夏季・冬季一斉休業日を除く月曜日から金曜日の9時から16時としているが、センタースタッフが対応可能な場合は時間外でも利用が可能である。貸出方法はセンターに利用登録をし、直接貸出、返却をする。年間開室日について、2022年度は225日であった(2023年3月末まで)。2022年度の延べ利用者数は65人で、内訳は学部生58人、大学院生5人、研究生1人、教職員1人で128冊の貸出があった。新規利用登録は47人あった。平成23(2011)年のセンダー図書室開室以来延べ2.231冊の貸出を行ったこととなる(2023年3月末時点:図1)

利用者は、附属図書館の蔵書検索 OPAC で資料を検索し来室している。センター図書室の貸出期間は学部生でも 4 週間(貸出予約がない場合は貸出延長可)であり、返却ボックスをセンター室前に設置し、利用者の都合の良い時間に返却ができるよう工夫している。2023 年 3 月末時点で不明の図書はない。貸出本については、台帳と Access で管理し、利用者にはメールで返却のリマインドを行い、長期未返却の利用者が生じないよう注意を払っている。



2. 情報発信

2.1 ホームページによる情報発信

グローバル協力センターのホームページは、センターが主催・協力する各種イベント(公開講座、講演会、大学間連携イベント、履修説明会など)の学内外への通知・案内と活動報告を中心に年間約40件の情報を掲載している。

2022 年度はグローバル協力センターが主催するイベント等(SDGs セミナー8 回、アフガニスタン女子教育支援 20 周年記念公開シンポジウム、学生自主活動、ブータン連続セミナー20 回等)の情報を 54 件、新着情報(実施報告)を 43 件掲載した。なお、掲載した活動報告は、各セミナー参加学生、「共に生きる」スタディグループ・メンバーをはじめとするイベント参加学生、及びグローバル協力センター所属教員・スタッフが執筆した。

2.2 メーリングリストによる情報発信

2022 年度の「共に生きる」メーリングリストへの登録者は約 150 名(2023 年 3 月末時点)となり、学内及び学外(国連機関、JICA、NGO 等が主催するもの)のイベント情報や「共に生きる」スタディグループの活動情報を 152 件(2023 年 3 月末時点)発信し、関連するイベント等への関心を高めるきっかけを作った。

2.3 大学メールマガジン、公式 SNS 等による情報発信

上記以外の広報手段として、学内者に向けてイベント情報を発信する場合は大学メールマガジン(OchaMail)、学内掲示板及び電子掲示板(Digital Signage)、Twitter、Slack (Ochat)を利用し、一般向けに広く発信する場合は大学ホームページや Facebook を利用する等、よりタイムリーかつ広範囲にグローバル協力センターの活動や取組みを発信することに努めた。

2.4 パンフレットによる情報発信

これまで、グローバル協力センターではパンフレットを編集・印刷して、大学院オープンキャンパス(4月開催)や学部オープンキャンパス(7月開催)に来学された方々に広く配布し、その活動や取組みを発信してきた。新型コロナウイルス感染症拡大以降、パンフレットは電子版(PDF)のみを作成し、グローバル協力センターホームページに掲載するとともに、必要に応じ印刷してきたが、2022年度にはコンパクトな A4 版として更新・編集・印刷を行った。更新したパンフレット PDF 版はグローバル協力センターホームページに掲載済である。

グローバル協力センターとは

当センターは、国際協力を通じて女子教育を促進するための 活動拠点として、2003年7月に「開発途上国女子教育協力 センター」として開設されました。

2008年4月に「グローバル協力センター」に改組され、 国際協力、平和構築に関するお茶の水女子大学の教育、 研究。国際貢献を促進しています。

また、2017年からは、「持続可能な開発のための 2030アジェンダ・持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals: SDGs)を巡って、議論を深める

機会を提供するとともに、大学の国際協力に取り組んで



Access Map

- ●東京メトロ丸ノ内線「茗荷谷」駅より徒歩7分
- ●東京メトロ有楽町線「護国寺」駅より徒歩8分
- ●都営バス「大塚二丁目」停留所より徒歩1分

共に生きる



グローバル協力センター Global Collaboration Center



SUSTAINABLE GOALS





















お茶の水女子大学グローバル協力センター Global Collaboration Center (GCC) 〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1(学生センター棟308室)

TEL/FAX: 03-5978-5546 E-mail: info-cwed@cc.ocha.ac.ir https://www.cf.ocha.ac.jp/cwed/

2023年3月

グローバル協力センターの取り組み

開発途上国の社会経済,国際協力,NPO等に関する講義

NPOや国際協力実務経験を有するセンター所属の教員が授業、演習を開講して います。スタディツアーでは、講義・文献等から学んだことを基礎としつつ、開発途 上国の現場を実際に訪問し、フィールドワークを通して途上国の課題や国際協力 に関する理解を深め、自らが何をしていけばよいのかを強く意識してもらうことを 目指します。

【2022 年度の宝績】

- 国際共生社会論実習(全学共通),国際共生社会論フィールド実習(大学院設置科目)
- NPO 入門 (全学共通) ・NPO インターンシップ (LA) ・平和と共生演習 (全学共通) ・「平和と共生」実践演習 (大学院設置科目)

国際協力特論 (グローバル文化学環)

国際的課題を、本学学生が調査研究し、解決につながる道筋を見いだしてもらう ことを目指し、海外調査支援や学生自主活動の支援等を実施しています。



- · 「涂上国研究·国際協力分野海外調査支援」
- 「共に生きる」スタディグループ学生自主活動支援 ・大学間連携イベント ・センター図書室開室・貸出
- ・国際協力分野のキャリア等の情報提供

シンポジウム・講演会・セミナー

国際的な課題の解決に向けて活躍している専門家の識演を通して、どのような課題が あるのか、どのようにしてそれらの課題に挑戦していけばよいのかなど、学生自らが 目標を見出していく場を提供することにより、女性リーダー育成を目指します。



【2022 年度の実績】

・持続可能な開発目標(SDGs)セミナー ・ブータン連続セミナ ・アフガニスタン女子教育支援 20 周年記念公開シンポジウム

開発途上国の女子教育・乳幼児教育に関する支援

IICA課題別研修「乳幼児ケアと就学前研修(IICA委託)」

途上国においても重要性が高まっている幼児教育分野の人材育成の ための研修を実施しています。2006年から2017年の間、中西部アフリカ 地域の10か国から134名の研修員を受け入れ、2018年からは対象地域 をアフリカ、中東に拡大し、同分野の政策レベルでの人材育に貢献して



開発途上国の女子教育支援のための五女子大学コンソーシアム

本学では、日本政府のアフガニスタン復興支援の一環として、津田塾大学、東京女子大学、 奈良女子大学、日本女子大学と連携し、2002年に五女子大学によるコンソーシアムを締結し アフガニスタン女子教育復興のための女性教員研修を実施し、2002年から2012年の間、女性 教員等169名を受け入れました。五女子大学コンソーシアムは、2006年より支援対象を開発 途上国の女子教育に広げています。

・五女子大学コンソーシアム協定調印(2022 年更新)

アフガニスタン女子教育支援(野々山基金)

本学卒業生故野々山恵美子様の遺贈により設立された基金を原資として、2012年以降、研究 支援とネットワーク強化のため、毎年2名のアフガニスタン女性大学教員等を対象に短期研修 を行い、2019年までに16名を受け入れました。また、公益社団法人シャンティ国際ボランティア会 (SVA)と連携し、アフガニスタンにおけるオリジナル絵本作成と学校図書館への配布支援を 実施しています。

【これまでに8タイトル,計19,200冊のオリジナル絵本を作成・配布しています】

- ・『孤児の少女』(2013 年)・『カメとイチジクの木』(2014 年) ・『くじゃくの羽』(2015 年)・『幸せの半分は健康から』(2016 年)
- ・『パンダの冒険』(2017 年)・『ハミダと栄養 3 兄妹』(2018 年) ・『恩返し』(2019 年)・『let's count』(2020 年)



情報共有、ネットワーキング

「共に生きる」スタディグループを通じた情報共有、ネットワーキング

「共に生きる」スタディグループでは、スタディグループメンバーの学生による自主活動を支援するとともに、メーリング リストによる国際協力や平和構築に関する学内外の講演会、セミナー、イベント等の情報提供を行っています。

◆センター主催のセミナーやシンポジウム、報告書など 活動成果については以下サイトにて随時公開しています。 https://www.cf.ocha.ac.ip/cwed/index.html



更新されたグローバル協力センターパンフレット

- 3. 各種イベント・案内のポスター
- 3.1 持続可能な開発目標 (SDGs) セミナー





◆ 全体概要:

・エードルメ・ 本セミナーは、持続可能な関発目標(SDGs)が掲げる目標に取り組む専門家等を招聘し、さまざまな課題 について多面的に検討していくものです。講師から専門とする課題に関する基準に関する機様や現状等につい でご紹介いただ。理解を深めることを目指しています。今回は、JICA(独立行政法人国際協力機構)や国 連機同び開発途上端における教育・保険分野の協力に従来し、国内では地域おこと等に関かり、現在は関係機 通機同び開発途上端における教育・保険分野の協力に従来し、国内では地域おこと等に関かり、現在は関係機

2022年 12月6日 (火) 15:00~16:30 人間文化研究棟 408室 (オンライン配信はありません)

小島 路生氏 (国際協力専門家 & 一般社団法人Think Locally Act Globally (TLAG) 事務局長 & トレイルランナー)

機両面が引き、金沢市在住、産成機を大学法学部卒業、スタンフォード大学教育大学院修了、 ● 海洋市出身、金沢市在住、産成機を大学法学部卒業、スタンフォード大学教育大学院修了、 ● 青年海外協力隊(グアテマラ)、JICAジュニア専門県(教育協力)、JICAシャーガス病対策プロジェ フト専門家 (ホンジュラス) を経て、国連思基金 (WINCEPT メンドネシア発展所教育担当官と して勤務、2010年からは国内協力に転身し、富山県立山町にて前接時の地域おこし協力限として、 遠端地域の地域づくり活動に3年間従事、東北での震災支援活動、JICA北陸での勤務を経て 2018年に国際協力内GOTLAGの参称局長に版任。隔年で全沢大学非常勤講所国際協力協)。

◆ 問合せ: お茶の水女子大学グローバル協力センター

SUSTAINABLE GOALS







「SDGsとインフラ支援」

◆ 全体概要:

▼ セミナーは、持続可能な開発目標(SDGs)が掲げる目標に取り組む専門家等を 招聘し、さまざまな課題について多面的に検討していくものです。講師から専門と する課題に関する経緯や現状、最新の動向等についてご紹介いただき、理解を深 ることを目指しています。今回は、SDGsの多くの目標達成に不可欠な多様なイン フラ整備につき、JTCA(独立行政法人国際協力機構)で開発途上国支援に長く関 わってこられた小中鉄雄様にお話しいただきます。 【今回のセミナーは、全学共通科目「国際協力特論」の公開講座を兼ねます。】

2022年 12月 13日 (火) 15:00~16:30

人間文化研究棟 408室 (オンライン配信はありません)

◆ 講師:

小中 鉄雄 氏 (埼玉大学研究機構研究推進室・レジリエント社会研究センター教授・ お茶の水女子大学SDGs推進研究所客員教授)

◆ 問合せ:

お茶の水女子大学グローバル協力センター

info-cwed@cc.ocha.ac.jp

SUSTAINABLE GOALS







SUSTAINABLE GALS

2022年 12月 20日 (火) 15:00~16:30 人間文化研究棟 408室 (オンライン配信はありません)

◆ 講師:

太田 美穂 氏

(株式会社コーエイリサーチ&コンサルティング 主席コンサルタント)
愛知県出身、本学家政学部児童学科を、米デューク大学国際開発政策プログラム修了。2002年 ポリビ

変知県出身、本学家政学部児童学科を、米デューク大学国際開発政策プログラム修了。2002年 ポリビ

アシストンマー初等教育、モザンビーク教育養成、グアテマラ算数、数学など世界各国のJICA教育分野プロ

ジュクト・各種遺査・研究に従事。現在、モザンビーク初等教育技術協力プロジェクトに業務主任者と

して従事中。

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

4849・

◆ 後援: お茶の水女子大学SDGs推進研究所

◆ 問合せ: お茶の水女子大学グローバル協力センター info-cwed@cc.ocha.ac.jp

SUSTAINABLE GOALS

info-cwed@cc.ocha.ac.jp



(会場: お茶の水女子大学 生活科学部本館 212室)

お問合せ・申込み:グローバル協力センター (info-cwed@cc.ocha.ac.jp)



Exchange Year 2022

要事前申込 参加費無料

映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ①

『アジア食紀行』「コウケンテツが行くブータン(前編)」(2012年)

海士ブータンプロジェクト、日本ブータン友好協会

グローバル協力センター講師 平山雄大 <u>hirayama.takehiro@ocha.ac.jp</u>

♦ 問合せ









Exchange Year 2022

参加費無料

参加申込はコチラッ https://bit.ly/3rlpCAT

◆ コメンテーター:

◆ 問合せ:

高橋洋氏(日本ブータン研究所研究員/ 『地球の歩き方 ブータン』編集者) +平山雄大 (お茶の水女子大学グローバル協力センター講師)

協力:海士ブータンプロジェクト、日本ブータン友好協会

グローバル協力センター講師 平山雄大 <u>hirayama.takehiro@ocha.ac.jp</u>







参加甲込はコチラリ https://bit.ly/3HIFXAd



2022 1 2022

要事前申込 参加費無料

Exchange Year 2022

参加費無料

参加申込はコチラ [§] https://bit.ly/30SQ5Fo

連川智明 氏 (元JICA専門家(地方行政)) +平山雄大 (お茶の水女子大学グローバル協力センター講師)

海士ブータンプロジェクト、日本ブータン友好協会

青木薫 氏 (シデ・ブータン・ツアーズ&トレックス コーディネーター/ブータン日本語学校校長)

コーディネーター/フーフンローショー・・・・・・・・・・ + 平山雄大 (お茶の水女子大学グローバル協力センター講師)

| 同台で・ グローバル協力センター講師 |平山雄大 | <u>hirayama.takehiro@ocha.ac.jp</u>

同合せ・ グローバル協力センター講師 平山雄大 <u>hirayama.takehir</u>







◆ 問合せ: グローバル協力センター講師 平山雄大 hirayama.takehi



エドツ級で、本セミナーは、<u>南アジアに位置するブータン王国を巡る諸相に触れること</u>を主目的とした、地域研究型のセミナーです。初学者にとって「ブータント門」となるような内容です。具体的には、毎回ブータンを扱った国内外の傾向操作品を取り上げ、①映像作品の対策、②コメンテーターからの簡単な解説、③質疑応答という遠れを予定しています。ぜひ気軽にご参加ください。 「毎回セミナーに、思キアンチで成分更振動を(制格)

2022年11月12日(土) 14:00~16:00

◆ 形式: オンライン (Zoomによるリアルタイム配信)

映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ ② 一『トラベリックスⅢ 世界体感旅行』「ブータン (ティンブー)」(2011年)—

野ロウゲンチョデイ氏 (福井大学国際地域学部学生) +平山雄大 (お茶の水女子大学グローバル協力センター講師)

海士プータンプロジェクト、日本プータン友好協会

◆ 問合せ: グローバル協力センター講師

グローバル協力センター講師 平山雄大 <u>hirayama.takehiro@ocha.ac.jp</u>





要事前申込 参加費無料 参加申込はコチララ https://bit.lv/3cHbod



◆ 全体概要: 本セミナーは、由アジアに位置するブータン変置を巡る技術に触れることを主目的とした。地域研究製のセ まナーです。助中者にとって「ブータン人門」となるような内容です。具体的には、毎回ブータンを扱った国 内外の新田映像作品を取り上げ、①映像作品の限制、②コメンテーターからの簡単な解説、③質疑応答という 週れを予定しています。ぜの発展にご参加ください。 【参照のセミナーは、日本フータン研究所の変物回復・(第164回アータン報告)を参えます。】

2022年11月19日(土) 14:00~16:00 ◆ 形式: オンライン (Zoomによるリアルタイム配信)

映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ ② - 『トラベリックスⅢ 世界体感族行』「ブータン (パロ)」(2011年)—

原田ひとみ氏 (日本ブータン友好協会会員) +平山雄大 (お茶の水女子大学グローバル協力センター講師)

海士ブータンプロジェクト、日本ブータン友好協会

グローバル協力センター講師 平山雄大 hirayama.takehi





要事前申込 参加費無料



2022年12月17日(土) 14:00~16:00

◆ 形式: オンライン (Zoomによるリアルタイム配信)

映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ ② — 『ASIA テレビは面白い』(ブータン部分抜粋版) (2002年)他—

青木薫 氏 (シデ・ブータン・ツアーズ&トレックス コーディネーター/ブータン日本語学校校長)

コーティポーター/ クーァンロ本細子状状状/ +平山雄大 (お茶の水女子大学グローバル協力センター講師)

海士ブータンプロジェクト、日本ブータン友好協会

◆ 問合せ: グローバル協力センター講師 平山様大 hirayama.takehi





要事前申込 参加費無料 参加申込はコチラリ https://bit.ly/3HF9Lxl



本セミナーは、<u>南アジアに位置するブータン王国を巡る諸相に触れること</u>を主目的とした、地域研究型のセ ミナーです。初学者にとって「ブータン入門」となるような内容です。具体的には、毎回ブータンを扱った国 内外の新田様件品を取り上げ、同味性作品の関係、②コメンテーターから同様年が観、③質疑応答という 流れを予定しています。ぜひ長親にご参加ください。

2023年1月7日(土) 14:00~16:00

オンライン (Zoomによるリアルタイム配信)

映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ ② - 『秘境ブータン (1) 王都の仮画祭り』 (1983年) -

脇田道子氏 (日本ブータン研究所研究員)

間的ロシュリン (日本ブータン研究所研究員) +平山雄大 (お茶の水女子大学グローバル協力センター講師)

海士プータンプロジェクト、日本ブータン友好協会

問合せ: グローバル協力センター講師 平山雄大 hirayama.takehi













3.3 途上国研究·国際協力分野海外調查支援

2022 年度 申込 海外調査支援 ~途上国研究・国際協力分野~

2022 年度「途上国研究・国際協力分野海外調査支援」募集を行います。 本事業は、本学博士前期・後期課程に在籍する学生が行う海外調査のための 費用の一部を支援するものです。

募集要項をセンターホームページに掲載しましたのでご確認ください。

※支援分野・テーマ:

- (1) 国連・持続可能な開発目標 (SDGs) の 17 ゴールに関連するテーマ
- (2) 開発途上国の女子教育、基礎教育、ノンフォーマル教育に関連するテーマ

※対象:本学大学院博士課程(前期・後期)在籍者 (休学中の者を除く)

※申請受付期間:

2022年5月17日(火)~6月14日(火)17:00

※説明会は終了しましたが、参加できなかった方で応募を希望される方は グローバル協力センターまでお問合せください。

※詳細はグローバル協力センターホームページをご覧ください。

問合せ先:お茶の水女子大学グローバル協力センター

2022年度

海外調查支援募集

~途上国研究・国際協力分野~

秋募集

2022 年度「途上国研究・国際協力分野海外調査支援」 秋募集を行います。 本事業は、本学博士前期・後期課程に在籍する学生が行う海外調査のため の費用の一部を支援するものです。

説明会を開催しますので、応募を検討している方は必ずご参加ください。

【日時】2022年10月14日(金)12時30分~13時

【場所】 グローバル協力センター室(学生センター棟 308 室)

※対象:本学大学院博士過程(前期・後期)に在籍する学生

(休学中の者を除く)

- ※支援分野・テーマ: 1. 国連・持続可能な開発目標 (SDGs) の 17 ゴールに関連するテーマ
- 2. 開発途上国の女子教育、基礎教育、ノンフォーマル教育に関連するテーマ



回流に 後を受 同合せ先: お茶の水女子大学グローバル協力センター 回答が、TEL:03-5978-5546 E-Mail: info-cwed@cc.ocha.ac.jp

3.4 その他









グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成 -女性の役割を見据えた知の国際連携— 令和4 (2022) 年度 実施報告書

2023年3月

発行:お茶の水女子大学グローバル協力センター

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1.1

 ${\bf Tel\&Fax}: 03\text{-}5978\text{-}5546$

E-mail: info-cwed@cc.ocha.ac.jp

グローバル社会における平和構築のため 一女性の役割を見据えた知の国際連携―

令和4(2022)年度 実施報告書

